



九州大学
応用生理人類学
研究センター一年報

|| 2023-2024 年度 ||

Physiological Anthropology Research Center
Kyushu University
Annual Report 2023-2024

2023-2024年度

応用生理人類学研究センター一年報

III 応用生理人類学研究センター

PHYSIOLOGICAL ANTHROPOLOGY RESEARCH CENTER



九州大学
KYUSHU UNIVERSITY

目次

1. センター長挨拶	1
2. センターの概要	2
3. イベント報告	
・第 15 回 PARC 講演会「Emerging Issues on Human Factors and Ergonomics Research of Agriculture and Manufacturing」	4
・第 16 回 PARC 講演会「Safety, aesthetic, and manufacturing efficiency in local product development: Rattan baby cribs in Indonesia」	5
・PARC10 周年記念シンポジウム「未来の環境と人」	6
・レジリエンス部門勉強会「レジリエンスを再考する—子供の育ちとウェルビーイングの視点から—」	7
・ソウル大学—九州大学ワークショップ「デジタルトランスフォーメーションと学際的人間科学」	8
・第 77,78 回 日本人類学会 一般シンポジウム	10
・2024 年度「光と生体リズム研究部会・睡眠研究部会」講演会	11
4. 部門活動報告	
・環境適応部門	12
・アクティブライフ部門	14
・感性・ヒューマニティ部門	16
・レジリエンスデザイン部門	18
5. 構成員研究業績一覧	20
6. 外部研究資金一覧	34

1. センター長挨拶

九州大学大学院芸術工学研究院附属 応用生理人類学研究センター (PARC) は、2024 年度で設立 10 周年を迎えました。これまで、多くの研究者・学生・関係機関の皆さまに支えられながら、人間の生理的・生物学的特性に基づく研究を通じて、「人・環境・技術の調和」に向けた科学的探究を進めてまいりました。心より感謝申し上げます。

近年、社会は急速なデジタル化と AI 技術の進展により、現実空間と仮想空間が融合する新たな生活環境へと移行しています。本センターはこの変化に対応し、従来の環境生理研究を基盤に、人間が多様な環境へどのように適応するかを学際的に探る研究を展開しています。

とりわけ、本センターが主体的に推進している概算要求事業「マルチバース社会デザイン研究拠点形成プロジェクト (MulSHIP)」との連携は、活動の大きな柱となっています。MulSHIP は、マルチバース社会における多様な幸福 (Well-being) の実現を目指す拠点であり、当センターはその中核として、人の生理・感覚・行動の科学的理解に基づく知見を提供しています。仮想環境における感情応答や身体反応の計測など、新たな研究領域の開拓が進んでいます。

生理人類学は、時間軸と空間軸の視点を持ちながらヒトの生理特性について解明し、人間生活の質の向上に直接かかわる学問です。本センターは生理人類学的視点を実社会に応用し「人間らしい社会のあり方」を提案することを使命の一つとしています。設立 10 周年を節目に、私たちはこれまでの成果を礎とし、未来社会における人間中心の科学とデザインの発展に誠実に取り組んでまいります。

九州大学大学院芸術工学研究院附属
応用生理人類学研究センター センター長
前田享史

2. センターの概要

応用生理人類学研究センターの組織構成

当センターは、環境適応部門、アクティブライフ部門、感性・ヒューマニティ部門、レジリエンスデザイン部門の4つの研究部門から構成されています。



【環境適応部門】

現代社会で暮らす人々は、多くの時間を快適と思える人工環境の中で過ごしていますが、その人工環境は私たちの健康や生理機能に負の影響をもたらす場合もあります。また、地球気候変動や感染症流行などの社会問題によっても健康が脅かされると同時に、ライフスタイルや生活環境が著しく変化しています。このような状況に私たちは適応できているのでしょうか？ 現代人の集団内要因（性、年齢、遺伝子型など）ごとの生物学的資質の特徴を理解し、様々な環境に対する適応反応を明らかにする研究を通して、社会問題に起因したライフスタイルや生活環境の変化に対応できる、人間にとって真に快適で持続可能な「デザイン」の構築に寄与していきたいと考えています。

【アクティブライフ部門】

本部門では、高齢者、障害を有する人々、さらには子どもなどを対象に、生理人類学の観点から形態的、機能的特徴を解明し、多くの研究実績を挙げてきました。今後はそれらの研究をより発展させ、人々の特性に応じた生活（衣食住）、労働、スポーツ、教育、介護などに関わる製品や、環境などのデザインの提案を進めていきます。高齢者支援や介護支援ではなく、それぞれの年齢層や障害の心身機能の特性を明らかにし科学的に把握した上で、アクティブな生活へと導くための方策を提案し、活気ある社会の構築に寄与していきたいと考えています。

【感性・ヒューマニティ部門】

ヒトの人間性に関する研究を行っています。ヒトの人間性は、形態や生理機能と同じように人類の進化の中で様々な環境に適応しながら獲得されたものと言えます。本部門では人間性の一部である感性をテーマにしています。感性とは何かを感じることでできる力と言えます。また “うまく生きる” ための “こころの働き” として捉えることもできます。本部門では様々な環境で生きるヒトの感覚特性の多様性やそこから生まれる感情、共感能力、コミュニケーション能力、創造性などを、人間の発達や進化の視点も含め、行動科学的、神経科学的、遺伝学的な方法を用いて探究し、人間らしく生きることのできる社会の構築に寄与していきたいと考えています。

【レジリエンスデザイン部門】

人間の様々なストレスに対して「歪みを跳ね返す力」がレジリエンスで、極度に不利な状況でも、正常な平衡状態を維持できる能力を言います。近年、自然の災害が多発し、その度に被災者が発生しています。この第一次被害後に体育館や公民館等の公共施設で集団生活を送り、その2、3か月後に仮設住宅に入居されることとなります。この間に被災者は心理的・生理的ストレスを受ける場合が多々あります。生理人類学はこのストレスを軽減するために貢献すると考えています。

応用生理人類学研究センターのメンバー（2025年3月31日現在）

【環境適応部門】

前田 享史	芸術工学研究院人間生活デザイン部門	教授
西村 貴孝	芸術工学研究院未来共生デザイン部門	准教授
伊藤 浩史	芸術工学研究院人間生活デザイン部門	准教授
瀬口 典子（協力研究員）	比較社会文化研究院環境変動部門	特任研究者

【アクティブライフ部門】

村木 里志	芸術工学研究院人間生活デザイン部門	教授
松隈 浩之	芸術工学研究院ストラテジックデザイン部門	准教授
LOH Ping Yeap	芸術工学研究院人間生活デザイン部門	助教
大草 孝介（協力研究員）	中央大学理工学部ビジネスデータサイエンス学科	准教授
能登 裕子（協力研究員）	医学研究院保健学部門	講師

【感性・ヒューマニティ部門】

樋口 重和	芸術工学研究院人間生活デザイン部門	教授
平松 千尋	芸術工学研究院未来共生デザイン部門	准教授
澤井 賢一	芸術工学研究院人間生活デザイン部門	助教
元村 祐貴	芸術工学研究院人間生活デザイン部門	助教
橋彌 和秀（協力研究員）	人間環境学研究院人間科学部門	教授
早川 敏之（協力研究員）	基幹教育院自然科学実験系部門	准教授

【レジリエンスデザイン部門】

尾方 義人	芸術工学研究院人間生活デザイン部門	教授
藤 智亮	芸術工学研究院未来共生デザイン部門	教授
西村 英伍	芸術工学研究院人間生活デザイン部門	助教
田北 雅裕（協力研究員）	人間環境学研究院教育学部門	講師
縄田 健悟（協力研究員）	福岡大学人文学部	准教授

3. 活動報告（センター主催）

第15回 応用生理人類学研究センター講演会

Emerging Issues on Human Factors and Ergonomics Research of Agriculture and Manufacturing（農業と製造業における人間工学の最新課題と今後の展望）

講師：Dr. Josefa Angelie D. REVILLA（ジョセファ アンジェリ レービラ）

Associate Professor, Department of Industrial Engineering, University of the Philippines Los Baños, Philippines（フィリピン大学・工業設計部門・准教授）

講師：Dr. Jeewon CHOI（ジウォン チェ）

Assistant Professor, Department of Industrial and Systems Engineering, Dong-A University, Korea（韓国東亜大スクール・産業システム工学科・助教）

2023年7月31日（月）14:40～16:20 大橋キャンパス 1号館3階会議室

講演者の紹介

Revilla博士とChoi博士は九州大学大学院芸術工学府芸術工学専攻デザイン人間科学国際コースの修了生で、それぞれ「Effects of short-term exposure to hand-arm vibration on physiological responses and hand functions」および「Motor control characteristics of muscle force release for external assistance」の学位論文により博士号を取得されました。

Revilla博士はフィリピン帰国後、農業機器のデザインをはじめ、農業分野における人間工学および作業安全に関する研究を精力的に推進されています。一方、Choi博士は韓国帰国後、製造業分野における作業支援技術（アシストテクノロジー）や人間工学に関する研究を継続しており、実践的かつ学際的な取り組みを展開されています。

応用生理人類学研究センター・アクティブライフ部門所属の村木里志教授、Loh Ping Yeap助教との国際共同研究を推進するために、両博士を九州大学大学院芸術工学研究院に招聘しました。両博士の研究は、地域の特性や文化的背景を踏まえつつ、人間工学的視点を取り入れた意義深い取り組みであり、その成果を共有いただくことは、当センターにとっても貴重な機会であると考え、講演会を開催し、ご講演いただきました。

講演内容

本講演会は九州大学大橋キャンパスの会議室にて、対面形式で開催されました。はじめに、アクティブライフ部門の村木里志教授より、本講演会の趣旨説明と講師紹介が行われました。

講演ではまず、Revilla博士からは、農業分野における作業者の安全や健康を考慮した農業機器のデザインについて、フィリピンでのフィールドワークの写真を交えながら、具体的な事例とともに解説がありました。一方、Choi博士からは、製造現場における筋力補助や支援機器の効果的な活用に関する研究が紹介され、動作解析の結果や実験映像を交えて、わかりやすく説明がなされました。講演後には、参加者から多くの質問が寄せられ、現場応用や国際的連携の可能性について、活発な意見交換が行われました。



写真 講演会後の集合写真。Revilla博士（後列右から4番目）とChoi博士（前列右から3番目）

3. 活動報告（センター主催）

第 16 回 応用生理人類学研究センター講演会

Safety, aesthetic, and manufacturing efficiency in local product development: Rattan baby cribs in Indonesia (インドネシアにおけるラタン製ベビーベッドの地域製品開発における安全性、美的価値、および製造効率)

講師：Dr. Lu' lu Purwaningrum（ルル プルワニングラム）

Associate Professor, Faculty of Art and Design, Universitas Sebelas Maret, Indonesia (インドネシア・セバラスマレット大学・芸術デザイン学部・准教授)

2024 年 10 月 10 日（木）12:30～16:30 大橋キャンパス 5 号館 524 教室

講演者の紹介

Lu' lu Purwaningrum 博士は九州大学大学院芸術工学府芸術工学専攻デザイン人間科学国際コースの修了生で、「Redesigning Indonesian classroom furniture to ensure ease of transport by elementary school students (児童による運搬が容易なインドネシア国向け教室用家具のリデザイン)」という学位論文にて博士学位を取得されました。その学位論文は下記にて公開されています。

<https://doi.org/10.15017/1670408>

当博士はインドネシアに帰国後も子ども（乳幼児を含む）を対象としたプロダクト・インテリアデザインの研究を精力的に推進しています。応用生理人類学研究センター・アクティブライフ部門所属の村木里志教授、Loh Ping Yeap 助教との国際共同研究を推進するために、当博士を九州大学大学院芸術工学研究院に招聘しました。当博士の研究は、地域の特性や文化的背景を踏まえつつ、人間工学的視点を取り入れた意義深い取り組みであり、その成果を共有いただくことは、当センターにとっても

貴重な機会であると考え、講演会を開催し、ご講演いただきました。

講演内容

本講演会は九州大学大橋キャンパスの教室にて、対面形式で開催されました。はじめに、アクティブライフ部門の村木里志教授より、本講演会の趣旨説明と講師紹介が行われました。続いて、Lu' lu Purwaningrum 博士が自己紹介を行い、所属大学や博士後期課程での研究について簡単に紹介した後、講演が始まりました。

講演ではまず、インドネシアにおける藤（ラタン）の生産や文化的背景についての説明があり、その後、ラタンを用いたベビーベッドのデザイン活動が紹介されました。多くのステークホルダーと連携しながら、伝統文化や美的価値を尊重しつつ、ベビーベッドの安全性やユーザビリティを追求する取り組みについて、多数の写真を用いてわかりやすく説明されました。講演後には、参加者から多くの質問が寄せられ、活発な議論が交わされました。



講演会後の集合写真（中央（左から 6 番目）が Lu' lu Purwaningrum 博士）

3. イベント報告（センター主催）

応用生理人類学研究センター10周年記念シンポジウム

「未来の環境と人」

2024年12月21日（月）13:00～15:00

九州大学大橋キャンパスデザインコモン および Zoom 配信

2014年に当センターが設立されて以来10周年経過することを記念して、センター主催のシンポジウムを開催した。

ここ10年で情報化が促進し内閣府がSociety5.0を発表したことで近未来の社会像が明確に示され、加えてAI技術の発達により、人々の生活はより快適になりつつある。一方COVID-19パンデミックのように人々の生活を激変させた社会問題も発生した。このように我々を取り巻く環境は日々変化している。

以上から当センター設立10周年の記念シンポジウムとして「未来の環境と人」を主テーマとして下記の内容で開催した。

プログラムと内容

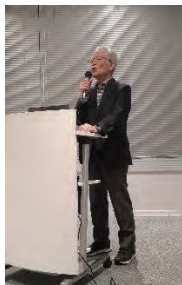
開会挨拶 安河内 朗（九州大学名誉教授）

内容：「未来の環境と人」

- ・前田享史「快適環境と適応能」
- ・村木里志「テクノロジー社会におけるシニアのアクティブライフ実現に向けて」
- ・元村祐貴「感性研究の現在と未来」
- ・西村英伍「私たちのレジリエンスを見つける方法：人とAIでつくる未来の行動観察」



イベント案内ポスター



開会および意見交換の様子



講演の様子

3. イベント報告（センター主催）

レジリエンス部門勉強会

「レジリエンスを再考する—子どもの育ちとウェルビーイングの視点から—」

2025年1月11日（土）14:00～16:00 九州大学大橋キャンパス

主催：九州大学 Parc レジリエンスデザイン部門

開催趣旨

応用生理人類学研究センターのレジリエンスデザイン部門では、社会包摂を含む幅広い人の営みを研究の対象としている。この講演会では「子どもの育ち」に着目し、様々な困難を抱えた子どもと社会の在り方について考えるために企画された。

社会が非常時においてレジリエンスを発揮するには平時の社会包摂のありかたにも目を向けることが重要であると考え、「どのように共に考え、感じ、判断するか」という問いを社会に提示することも重要な役割と考えているからである。

講演者の紹介

講演者の山口有紗先生（小児科専門医・子どものこころ専門医）は、現在子どものウェルビーイングや子どもの権利についての調査研究のほか、児童相談所での医療相談や行政のアドバイザーなど幅広い活動をされている。

本部門のメンバーでもある田北雅裕先生（九州大学大学院芸術工学研究院 応用生理人類学研究センター レジリエンスデザイン部門）は里親支援などの子どもと社会の関わりについて研究している。

講演内容

講演の序盤では、まずウェルビーイングを形成する要素としてのエコロジカルモデルを軸に、健康な心身の発達に必要な「育ちの土台」について論じられた。その中でアタッチメント・システムにも言及があり、情動の崩れを自身と他者との関係性によって調整する仕組みを通じて、子どもに「この世界は安全である」と伝えることの重要性が強調された。また、子ども時代のポジティブな体験（Positive Childhood Experiences: PCEs）やネガティブな体験（Adverse Childhood Experiences: ACEs）が、その人のウェルビーイングと深く関連していることについても述べられた。

続いて、子どもの日々の行動に対しては、その背後に

あるトラウマや過去の無力感などに目を向ける視点が必要であることが指摘された。さらに、大きなストレスを受けた際に発揮された個人のレジリエンスが、時間の経過とともにトラウマ症状として残る可能性があることにも触れられ、それに対してはコミュニケーションを通じた理解と解消が求められることが強調された。

講演後のディスカッションでは、山口先生と田北先生の間で近年の研究や活動の紹介が行われたのち、レジリエンスに関連する子どもの育ちや社会的包摂のあり方について活発な議論が交わされた。



講演の様子

今後はさらにレジリエンスデザインとケアデザインの表裏一体性についても考察を深める必要性があり、多様なレジリエンスにアプローチしていく。

3. イベント報告（センター共催）

「デジタルトランスフォーメーションと学際的人間科学： ソウル大学—九州大学ワークショップ」

Digital Transformation and Interdisciplinary Human Sciences: Seoul National University (SNU)-Kyushu University Workshop

2023年10月20日（金）14：00～17：00 九州大学大橋キャンパス

大学間学術交流協定を結んでいるソウル大学より8名の教員が九州大学大橋キャンパスを訪れ、ワークショップを開催し、研究施設見学、研究紹介、意見交換を行いました。研究施設見学では、環境適応研究実験施設における7つの人工気候室と様々な生理機能測定装置を紹介しながら研究内容を紹介し、居住空間実験住宅における動作解析装置と研究内容を紹介しました。ソウル大学からの研究紹介後、将来的な国際共同研究の可能性について意見交換を行いました。

プログラムと内容

14：00～15：10

研究施設紹介ツアー

前田享史教授、Loh Ping Yeap 助教、前田康彦技官、
Keneth Bautista Sedilla 研究員

1. 環境適応研究実験施設紹介
2. 居住空間実験住宅紹介



施設（環境適応研究実験施設）見学の様子

Digital Transformation and Interdisciplinary Human Sciences: Seoul National University (SNU) - Kyushu University Workshop
October 20 (Friday), 2023
Kyushu University, Ohashi Campus, Japan
Research Center for Human Environmental Adaptation

Time	Task	
14:00-14:10	Greetings and Introduction	Prof. Takafumi MAEDA (Kyushu Univ)
14:10-15:00	Facility Tour: "Research Center for Human Environmental Adaptation"	
Time	Subject	Presenter (Affiliation)
16:00-16:10	Digital Transformation _ Introduction	Prof. Jaewook LEE (SNU)
16:10-16:15	Nuclear Energy System & Safety	Prof. Eung Soo KIM (SNU)
16:15-16:20	Energy, Environment and Sustainability in ECE	Prof. Sung Jae KIM (SNU)
16:20-16:25	Transportation Engineering	Prof. Chungwon LEE (SNU)
16:25-16:30	Stability Analysis for Financial Engineering & Artificial Intelligence	Prof. Jaewook LEE (SNU)
16:30-16:35	Rehabilitation Movement for the Elderly and Disabled	Prof. Yongho LEE (SNU)
16:35-16:40	Personal Protective Clothing & Thermal Adaptation	Prof. Joo-Young LEE (SNU)
16:40-16:45	Pharmacology & Pharmaceutical Science	Prof. Seunghye LEE (SNU)
16:45-16:50	Agricultural System and Smart Farm Engineering	Prof. Kyoo SUH (SNU)
16:50-17:00	Break	
17:00-18:00	Discussion	
18:00-18:10	Closing & Group Photo	

Contact
Professor Takafumi Maeda, Department of Human Sciences, School of Design, Kyushu University, Japan
Professor Joo-Young Lee, Department of Fashion and Textiles, College of Human Ecology, Seoul National University (SNU), Korea

Directions
Ohashi Campus
Address: Faculty of Design/ Graduate School of Design/ School of Design, Kyushu University, 4-9-1 Shiobaru, Minamiku, Fukuoka, 815-8540, JAPAN. TEL +81-92-553-4400

ワークショップのチラシ

15：20～16：00

ソウル大学における研究紹介

1. 「Digital Transformation _ Introduction」
Prof. Jae Wook LEE (SNU)
2. Nuclear Energy System & Safety
Prof. Eung Soo KIM (SNU)
3. Energy, Environment and Sustainability in ECE
Prof. Sung Jae KIM (SNU)
4. Transportation Engineering
Prof. Chung Won LEE (SNU)
5. Stability Analysis for Financial Engineering & Artificial Intelligence
Prof. Jae Wook LEE (SNU)
6. Rehabilitation Movement for the Elderly and Disabled

Prof. Yong Ho LEE (SNU)

7. Personal Protective Clothing & Thermal Adaptation

Prof. Joo-Young LEE (SNU)

8. Pharmacology & Pharmaceutical Science

Prof. Seung Hee LEE (SNU)

9. Agricultural System and Smart Farm Engineering

Prof. Kyo SUH (SNU)

16 : 00~17 : 00

国際共同研究に向けた意見交換



意見交換の様子



参加者の集合写真

3. イベント報告（センター協力）

第 77、78 回・日本人類学会・一般シンポジウム

「環境適応とその多様性」開催による学会間交流の促進

2023 年 10 月 8 日 14:00~16:00 東北大学医学部 1 号館

2024 年 10 月 14 日 11:00~13:00 梅田スカイビルタワーウエスト

開催趣旨

ヒトが世界中に急速に拡散できた要因の一つに、柔軟な環境適応能力があり、こうした適応は現代の生理機能や健康にも関与していると考えられる。そこで、第 77 回日本人類学会において「環境適応とその多様性」を開催し、自然人類学分野の研究者を交えて活発な議論を行った。さらに第 78 回大会では「環境適応とその多様性Ⅱ」を継続開催し、人類学を主軸とした多様な研究分野の研究者との交流を促進している。なお、各回の開催概要は以下の通りである。

第 77 回日本人類学会・一般シンポジウム

「環境適応とその多様性」

- ・熱産生能力の遺伝的多様性と寒冷適応
中山 一大（東京大学大学院 新領域創成科学研究科）
- ・緯度と関連する生体リズム機能の多様性
北村 真吾（国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所）
- ・ヒトの高地適応の多様性と可塑性
西村 貴孝（九州大学 大学院芸術工学研究院）
- ・哺乳類の体サイズに見られる地理的変異とその背景
久保 麦野（東京大学大学院 新領域創成科学研究科）

第 78 回日本人類学会・一般シンポジウム

「環境適応とその多様性Ⅱ」

- ・生理的多型と遺伝的多型
太田 博樹（東京大学 大学院理学系研究科）
- ・熱産生多様性から探るヒトの寒さへの遺伝的適応
石田 悠華（東京大学大学院 新領域創成科学研究科）
- ・神経発達症を通じて考える神経発達が多様性
江頭 優佳（国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所）
- ・概日リズムからみた光環境への適応
樋口 重和（九州大学 大学院芸術工学研究院）

シンポジウムにおける議論

第 77 回大会においては、当センター・環境適応部門の西村が発表を行い、現代人における高地適応の多様性について概説した。加えて、他のシンポジストからは、寒冷適応と産熱能力に関する遺伝的多様性、生体リズムの多様性などの研究が紹介された。久保先生からは、鹿の体サイズに着目した哺乳類の形態的多様性の検討を通じて、環境への適応を長期的な進化の視点から論じる報告がなされた。当初の予定時間を大幅に超過したものの、生活者としてのヒトから古人類、さらには哺乳類全体にまで視野を広げた適応の多様性について、議論は尽きることなく、大変意義深いシンポジウムとなった。

第 78 回大会においては、感性・ヒューマニティ部門の樋口が、光環境への適応の多様性について、遺伝的要因を含めた現代人の個人差や集団差に焦点を当てた発表を行った。さらに、ヒト全体における遺伝的多様性と生理的多型、特に褐色脂肪の活性に関連した寒冷適応の多様性や、小児を含む神経発達の多様性についても紹介され、前年の議論を踏まえつつ、より広範な脳機能・神経系への議論へと展開された。前年に引き続き、多数の参加者による活発な議論が行われ、日本人類学会における応用生理人類学研究の認知度向上や、研究者間および学会間の交流促進に大きく寄与したと言える。

今後の展望

第 79 回大会においても、3 回目となる同様のシンポジウムの開催を継続する予定である。日本人類学会は古人類学や形態学の研究者が多い傾向にあるが、我々の生理機能を含む表現型の多様性とそのメカニズム研究にも関心が寄せられている。一方、応用生理人類学においても、ヒトの進化および適応の歴史を理解した上で研究を進めることは極めて重要であり、本シンポジウムを通じた研究者・学会間の交流は、より踏み込んだ共同研究の促進や人類学全体の発展にも寄与するものと考えられる。

3. イベント報告（センター協力）

日本生理人類学会 光と生体リズム研究部会・睡眠研究部会

2024年8月31日 16:00～18:00 九州大学大橋キャンパス デザインコモン2F

ハイブリッド開催

後援：九州大学大学院芸術工学研究院 応用生理人類学研究センター

開催内容

座長：樋口重和（九州大学大学院芸術工学研究院）、北村真吾（国立精神・神経医療研究センター）

講師1：野井真吾 教授

（日本体育大学 子どものからだ研究所）

「日本の子どもの睡眠事情とその改善のためのアプローチ」

講師2：諸隈誠一 教授

（九州大学大学院医学研究院 保健学部門）

「胎児の睡眠発達および胎児期の環境が生後の睡眠・発達に与える影響」

開催趣旨

日本人成人の睡眠時間は世界の中で最も短いことが知られているが、その傾向は子どもでも同じである。睡眠時間不足は、日中の眠気の増加やパフォーマンスの低下を引き起こすだけでなく、抑うつや肥満などの問題も引き起こす。本研究会では、学童期の子どもの睡眠を長年研究されている日体大学の野井先生に「日本の子どもの睡眠事情とその改善のためのアプローチ」と題してご講演をいただいた。次に、九州大学の諸隈先生に「胎児の睡眠発達および胎児期の環境が生後の睡眠・発達に与える影響」についてご講演頂いた。

講演内容

野井先生の講演では、都会から山村留学をした小学生のデータが示され、山村留学によって概日リズムが夜型から朝型化することを、メラトニンのデータをもとに示された。また、自然の中でのキャンプ生活でも概日リズム位相が前進することを明らかにした研究も紹介されていた。これらの研究に共通することは、日中の光曝露が増えたこと、夜の人工照明の曝露やスクリーンタイムの減少が影響していると考えられた。

諸隈先生の講演では、最初に胎児の眼球運動を記録した貴重なデータが紹介された。胎児期の眼球運動はレム睡眠の原型と考えられており、胎児期の眼球運動の頻度脳発達の間には負の相関があることが報告された。また胎児期の環境として、母親の睡眠習慣が不規則な場合、出生後の児の発達にも影響する可能性が示された。

総合討論では、子どもや胎児の概日リズムや睡眠の実態からメカニズムまで幅広い質疑が行われた。現代社会では、母子ともに概日リズムや睡眠が乱れない環境を整えることの重要性が再認識された。写真は講演（左）と総合討論（右）の様子。



環境適応部門

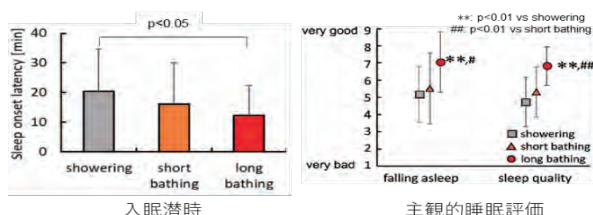
1. 入浴に伴う体温の変化が睡眠に及ぼす影響（前田享史）

(Maeda T, Koga H, Nonaka T, Higuchi S. Effects of bathing-induced changes in body temperature on sleep, *J Physiol Anthropol* 42, 20, 2023)

入浴が睡眠に良い影響をもたらすことは先行研究で明らかにされていたが、入浴に伴う深部体温の上昇の程度が睡眠に及ぼす影響は不明であった。本研究では23~54歳の健康な男女23名を対象として、各参加者の自宅而就寝1時間半~2時間前に①シャワー浴のみ、②短めの浴槽浴（平均5分）、③長い浴槽浴（平均16分）の3条件（湯温40℃）で入浴し、その後の睡眠を活動量計および主観申告で評価する実験を行った。

その結果、活動量計から評価した睡眠潜時は、「シャワー浴」と比較して、「長い浴槽浴」で有意に短縮し、主観的睡眠評価は、「長い浴槽浴」が「シャワー浴」および「短めの浴槽浴」と比較し有意に高得点を示した。また、深部体温は「長い浴槽浴」では他条件と比較して入浴後に大きく上昇し、入浴後から睡眠前にかけて大きく低下した。

これらの結果から、就寝1時間半~2時間前に入浴において、「長めの浴槽浴」は他条件と比較し、深部体温の上昇度が大きく、その後の血管拡張反応が誘発され放熱が促進することで、入浴後から睡眠にかけて深部体温の大きな低下をもたらした結果、睡眠潜時や睡眠の質に効果的であったと推察された。



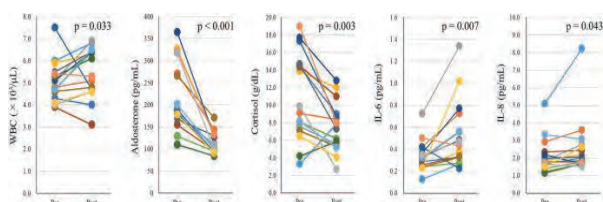
2. 低地居住者の急性低圧環境における内分泌・炎症・免疫応答とその個人差について（西村貴孝）

(Nishimura et al. Endocrine, inflammatory and immune responses and individual differences in acute hypobaric hypoxia in lowlanders. *Sci Rep* 13,

12659, 2023)

低地に住む人が高山のような低気圧・低酸素環境にさらされると、体内の酸素を保つために循環動態に変化が生じる。しかし、このような環境下で他の生理機能がどのように変化するかについては、十分に解明されていない。そこで本研究では、健康な低地居住者を対象に、高度3500メートルの環境を模した気候チャンバーにおいて75分間の短時間曝露を行い、血液中の内分、炎症反応、免疫に関する変化および個人差を調査した。

その結果、低圧曝露後には、アルドステロンおよびコルチゾールといったホルモンが有意に減少し、一方で炎症に関与するインターロイキン (IL) -6、IL-8、白血球数は有意に増加していた。また、末梢血中酸素飽和度 (SpO₂) が低い個体ほど IL-6 および白血球数が高く、IL-8 が高い個体ではコルチゾールも高い傾向が見られた。これらの結果は、わずか75分間という短時間の低圧曝露であっても、内分泌、炎症、免疫といった生体反応が引き起こされること、そして SpO₂ が低下しやすい個体ほどその反応が顕著に現れる可能性があることを示唆している。本研究は、急性の高地環境下における生理的応答および体内の恒常性維持システムの相互作用を理解するための基礎的資料となる。



血液成分およびサイトカインの個体別の変化。低圧曝露後、アルドステロンとコルチゾールは有意に減少し (p<0.05)、白血球数、IL-6 および IL-8 は有意に増加した (p<0.05)。

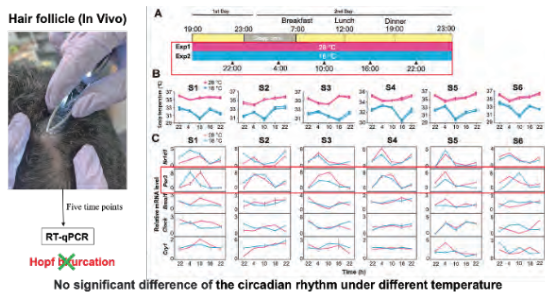
3. 概日リズムの温度依存性とゆらぎ（伊藤浩史）

(Xiao et al. *BioRxiv*, Kaji et al. *arXiv*, *J Theor. Biol.* 2023)

温度は概日リズムの振幅に影響をすることが原核生物 (シアノバクテリア) を使った解析によってあきらかになってきた。そこで、ヒトにおいてもこの性質が保たれ

ているかを確認するため、ヒト培養細胞 U2OS を用いて低温下での概日リズムを生物発光によって観察した。振幅は温度降下とともに減少し、ホップ分岐と呼ばれる現象によって消失した。これは種を超えた概日リズムの温度依存性があることを示唆する。一方、異なる温度に滞在するヒト個体レベルの概日リズムについて、毛根細胞を使って解析したところ、このような明晰な温度依存性は見当たらず、体温ホメオスタシスが頭皮であっても有効に働いていることが確認された。

また概日リズムフリーラン周期は、毎日ゆらぐことが報告されている。このゆらぎに関する理論を構築した。概日時計が生み出す周期的なシグナルが下流に伝達されるとき、アウトプットとなる分子の分解レートがゆらぎ量の決定要因となり、周期ゆらぎを最小化する分解レートが存在することが数値的・解析的な手法によって特定された。また下流への制御は、正弦波的な制御関係のときに、ゆらぎを小さくすることが明らかとなった。



4. その他の活動（伊藤浩史）

九州山口沖縄リズム研究会 10 世話人 2023 年 4 月・福岡
九州山口沖縄リズム研究会 11 世話人 2024 年 4 月・福岡
定量生物の会 世話人 2025 年 1 月・福岡

5. 種子島広田遺跡の意図的頭蓋骨変形に関する研究（瀬口典子）

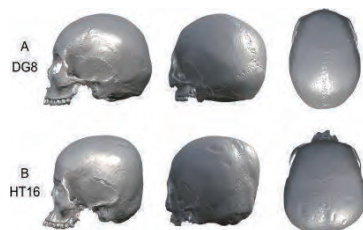
(Seguchi et al. Investigating intentional cranial modification: A hybridized two-dimensional/three-dimensional study of the Hirota site, Tanegashima, Japan. *PLOS ONE*, 18(8), e0289219, 2023)

本研究は、種子島・広田遺跡から出土した 3 世紀～7 世紀の古人骨に見られる、後頭部の顕著な扁平化を伴う頭蓋変形が意図的なものであるか否かを検討したものである。広田遺跡の頭蓋骨について、九州の縄文人骨および土井ヶ浜出土の弥生人骨と比較し、二次元および三次元の幾何学的形態分析手法を用いて解析を行った。その

結果、広田遺跡の頭蓋骨は他の集団と明確に異なる超短頭型であり、後頭部の著しい扁平化が確認された。さらに、頭蓋縫合部には特有の陥没が認められ、これらの形態的特徴は自然発生的な変形ではなく、意図的に施された人工頭蓋変形 (intentional cranial modification, ICM) である可能性が高いと結論づけられた。変形の目的については明確ではないが、集団のアイデンティティの表現や、貝製品の交易活動と関連していた可能性が示唆される。

6. その他の活動（遺骨研究倫理、瀬口典子）

近年、生物・自然人類学の分野では、過去に世界各地から収集された先住民や民族的マイノリティの遺骨、ならびに解剖学教育の目的で集められた遺骨の倫理的取り扱いが、重要な課題となっている。特に近年では、それらの遺骨に関係のある子孫コミュニティの理解と同意が強く求められるようになっており、それが得られない場合には、研究の実施や成果の公開が困難となる事例も増えている。こうした背景を受けて、人類学における人種主義および植民地主義の歴史と、それに関連する遺骨の倫理的使用に関する文献調査を実施した。その成果は、『生物史学研究』、『現代思想』、『Forensic Anthropology』などに論文として掲載された。また、日本人類学会およびアメリカ人類学会の年次大会では、遺骨返還問題や協働研究の課題に関するシンポジウムを企画・開催し、国際的な議論の場を設けた。さらに、アメリカ生物人類学会の Science Policy Committee 委員としても、遺骨を含むレガシーデータの倫理的使用に関する国際的議論に積極的に貢献した。



DG= 土井が浜 HT = 広田

Seguchi et al., 2023, *PLOS ONE*, CC-BY 4.0

受賞

2023 年度・一般社団法人日本生理人類学会・優秀研究賞・西村貴孝。

3. 活動報告（部門）

アクティブライフ部門

部門研究会

アクティブライフ研究会（第7・8回）の開催

障がい者や高齢者の運動、健康、生活、スポーツに関する研究者、企業関係者、学生が集い、研究成果や計画の発表を通じて議論や交流を深めている。尚、本研究会はアダプテッドスポーツ・ライフ科学研究会との共催である。

【第7回】（図1）

開催日：2023年9月20日（水）

会場：広島文化学園大学 坂キャンパス

参加者：19名（7機関から）

発表件数：14件

【8回】（図2）

開催日：2024年9月10日（火）

会場：立命館大学 衣笠キャンパス 敬学館

参加者：32名（14機関から）

発表件数：21件



図1 第7回アクティブライフ研究会



図2 第8回アクティブライフ研究会

公開講座「アクティブライフのための運動教室」の開催（村木、Loh）

2023年度に春夏期（4月～7月、計8回）、秋冬期（10月～2月、計8回）、2024年度に春夏期（4月～7月、計8回）、秋冬期（10月～1月、計8回）を大橋キャンパスデザインコモンにて開催した。地域高齢者約20名を対象として、健康運動を軸としてアクティブな生活を実践するための指導を行った（図3）。

本公開講座は2017年4月に開始され、2023年5月25日の開催をもって通算100回を迎えた。また、2023年度より本公開講座は九州大学大学院芸術工学府修士課程の科目「スタジオプロジェクト」に登録し、受講生が運営・企画に参加している。



図3 アクティブライフ運動教室

上：教室の様子、下：2024年度秋冬期の最終日（2025年1月）に撮影した集合写真

アクティブライフ部門主催研究会「Robotics and AI to boost motor skill learning: from science to market」の開催

(開催日：2025年3月27日、会場：九州大学大橋キャンパス1号館3階会議室)

イタリア・Rewing社のCEOであるJacopo Zenzeri博士の来日にあわせて、研究会を開催しました。Zenzeri博士は、Italian Institute of Technologyにおいてアシストデバイスを用いたリハビリテーションの研究に長年取り組み、その成果をもとに、ロボティクスデバイスのデザインおよび商品化を行うスタートアップ企業を立ち上げました。本研究会では、上述のテーマにて博士よりご講演いただきました。(図4)



図4 研究会後の集合写真
(左から4番目が Jacopo Zenzeri 博士)

研究の成果・取り組み例

人間の適応能に基づいた動作アシスト機能の最適化(村木)

人間にとって受け入れやすく、動作を習得・学習しやすいアシスト機能の条件を研究(科学研究費基盤研究A)。

日用品ハンドルの形状と使用性に関する研究(Loh)

傘や卓球ラケットなどの生活用品を対象に、ハンドル形状が動作や負担に与える影響を分析し、使いやすさ向上を目指す研究。

非接触センシングによる心動作・血圧推定技術の開発(大草)

レーダーデバイスを用いた心拍RRI・血圧推定技術を開発することでユーザーのストレスや血圧変動といった健康指標を非接触かつ継続的に計測可能な技術の開発を行う研究(科学研究費基盤研究B)

地域高齢者の運動機能維持と転倒予防に向けたモニタリング指標の検討(能登)

日常生活が自立している地域の高齢者を対象に、運動感覚と日常生活動作姿勢や動作時間、筋力および転倒経験・転倒リスクなどとの関連を分析し、早期からセルフモニタリングするためのツールや指標の提案を目指した研究(科学研究費基盤研究C)

講演・イベント関係

招待講演(部門構成員による講演)

- Guest Lecture (@Italian Institute of Technology, Italy) “Human Adaptation for Power Assistance” (2023年7月)(村木)
- The 1st International Conference on Research in Engineering and Science Technology 2023 (@Hasanuddin University in Indonesia). “Innovating Technology for Society with Long Life Expectancy” (2023年10月)(村木)
- International Seminar (@Sport Science Center, Universitas Muslim Indonesia, Indonesia). “Necessity of Sports/Exercise Science for Human Well-being” (2024年5月)(村木)
- Guest Lecture (@Universitas Sebelas Maret, Indonesia). “Experiment Design for Human Science” (2024年5月)(村木)

3. 部門活動報告

感性・ヒューマニティ部門

1. 概日リズムシステムの光感受性の民族差に関する研究（樋口重和）

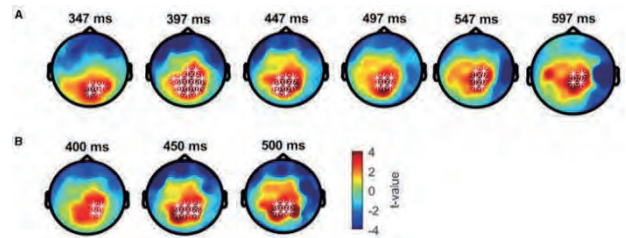
光はヒトの概日リズムにとって重要な同調因子であるが、人工照明の普及した現代では、夜の光がヒトの睡眠や概日リズムをかく乱する要因となっている。本研究では、光の影響の受けやすさの民族差に着目した研究を行っている。具体的には、光感受性の指標として光曝露によって引き起こされるメラトニンの分泌抑制や瞳孔の対光反射を測定することで、東アジア集団とヨーロッパ集団の比較を行っている。現在までに、ヨーロッパ集団は東アジア集団に比べて光感受性が高い（夜の光の影響を受けやすい）ことが明らかになりつつある。



光曝露の様子

2. 色覚の多様性に関する研究（平松千尋）

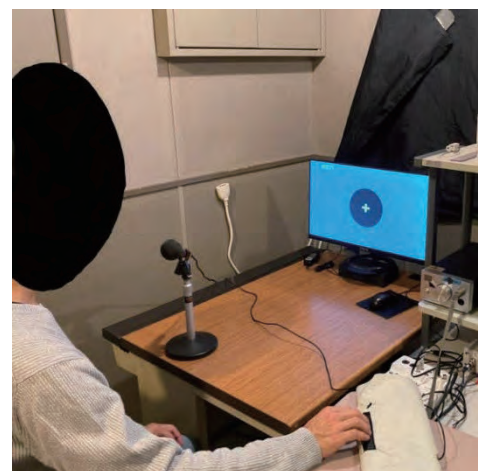
私たちの研究室では、異なる色覚を持つ人々が、同じ色刺激に注意を向け課題を遂行する際の行動と神経活動の類似と相違を調べました。その結果、色覚の連続的な違いが行動の違いをよく説明することが明らかとなりました。また脳波を用いた全脳の探索的解析では、それぞれの色覚にとって目立ちやすいと予測される色刺激に対して、神経応答がより早く生じる傾向が示されました。これらのことは、色覚の違いが行動や知覚、認知過程に影響を及ぼし、それぞれの色覚にとって課題遂行に適した色が存在することを意味します。



A：青緑色の標的刺激と緑色の標準刺激の間の反応の違い。B：赤色の標的刺激と緑色の標準刺激の間の反応の違い。Aの方がBよりも神経反応の差異が早急に現れている。(Takahashi et al., 2024 より抜粋)

3. 人間乱数に対する特徴量の個人識別における有効性と頑健性の定量化（澤井賢一）

人間が外部からの刺激などによらずに生成する乱数列を人間乱数といい、生成する人間の認知的な特性や心理状態などによって乱数列の統計的性質が変わるとされている。乱数列からは、含まれる数字の分布のエントロピーなど、乱数列の統計的性質を定量化した特徴量を計算することができる。これを応用して、特徴量を複数組み合わせることで個人の識別を試みた先行研究はあるが、どの特徴量に個人の特性がよく現れるかなどはよく分かっていなかった。そこで本研究では、個人識別に対する各特徴量の有効性と、乱数の生成主体の心理状態の変動に対する各特徴量の頑健性をそれぞれ定量化する手法を提案した。



口頭で生成された人間乱数を記録する様子

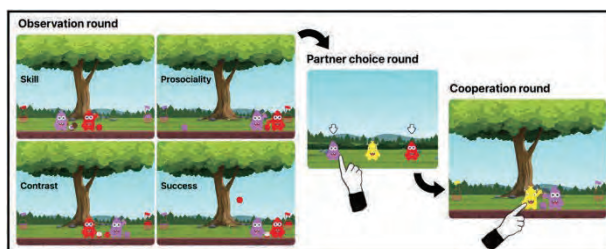
4. イヤホン型脳波計による睡眠計測に関する研究 (元村祐貴)

外耳道から脳波を測定する耳内脳波計は装着が簡単であることから、運転時等の限定的な場面において PSG に代わる脳波測定の手段として有用である可能性がある。本研究では、耳内脳波計を用いて睡眠脳波測定を行い、ヒトの入眠を感知する、すなわち覚醒と入眠期の判別を行うアルゴリズムを構築することを目的とした。睡眠障害のない(PSQI \leq 9)大学生 10 名に対し、耳内脳波計 VIE STYLE 社 VIE ZONE) と睡眠ポリグラフを装着した状態で 60 分間の睡眠脳波測定を行い、耳内脳波計による入眠の判別精度を検討した。覚醒と睡眠の判定を行ったところ、平均 70.0% \pm 13.7% (最小 48%、最大 90%) の精度で判定が可能であった。今後も精度向上に向け検討を行う予定である。

5. 技能／利他性推定に基づく協働パートナー選択の発達に関する研究 (橋彌和秀)

5~10 歳の児童および成人を対象に、他者の行動観察に基づく特性推論と、それに基づく協力的パートナー選択の発達過程を検討した。タブレット上で動作する協力ゲームを新たに開発し、これをプラットフォームに、中欧および日本において実験を実施した。その結果、児童は、5 歳時点から、登場するエージェントの傾向推定をおこなっているのに対し、概ね 7 歳頃から他者の親切さや能力に基づいてパートナーを選択する傾向を示し始め、加齢に伴いこの傾向は顕著となることが分かった。さらに、文化的背景により、親切さと能力のいずれを重視するかに違いが見られた(中央ヨーロッパ大学(ハンガリー

／オーストリア)との共同研究)。



6. 文化進化に関わる精神形質の適応進化の研究 (早川敏之)

文化進化は、社会性を背景とした個体間での知識の共有によって形成される集団的知性(集団脳)を基盤として、技術の洗練や適応的ノウハウの蓄積によっておこる。私たちの研究室では、この文化進化の駆動要素となる精神形質の適応的変化を明らかにするため、パーソナリティなどの精神形質や集団脳の形成に重要な社会性に障害がみられる精神疾患に注目している。そして、それらに関連する遺伝子群において現生人類や旧人のゲノム多様性データを解析することで、文化進化に関わる精神形質を特定し、その適応進化の検討を行っている。また、これら解析から精神疾患の起源や出現要因などの情報を得ることで、精神疾患が成立した進化的な背景の解明にも取り組んでいる。

受賞関連

2023 年 BioX 研究会奨励賞, 2023 年 11 月 (澤井賢一)

3. 部門活動報告

レジリエンスデザイン部門

部門研究会

レジリエンスデザイン部門では、2024年5月と10月に研究会を実施し、部門内でのレジリエンスに関する情報交換と議論を行った。研究会では、里親支援の文脈から社会包摂と当事者意識に関する議論が活発に交わされ、当事者研究・当事者学の重要性が共有された。また人の行動観察を定量化、客観化する研究に関する情報交換がなされ、機械学習技術による行動観察の省力化や、実際のデザインプロセスでの行動観察の客観化に関する事例の紹介が行われた。また、2025年1月に開催された講演会の企画や準備に関する議論も行われた。

レジリエンスデザインの転回に関する研究（尾方義人）

本研究では、「レジリエンス」を単なる構造や制度の回復力としてではなく、倫理の動的な更新過程として捉え直し、そのプロセスを「レジリエンスデザイン」として探究している。災害や制度的危機のような非連続な事態において、私たちがいかにして“正しさ”や“ふさわしさ”の基準を再構築し直すのか。その内在的なプロセスに焦点を当て、社会のなかに潜在する共鳴的判断の動態を記述し、設計しようとするものである。

熊本地震時の避難所掲示板に残された「言葉」や「沈黙」を手がかりに、災害という極限状況において人びとが行った判断・行動・気遣いの軌跡を分析した。それは、マニュアルや制度とは異なる「生活のなかの倫理判断の場面」であり、壊れた制度の“隙間”に立ち現れる、場の共鳴としての倫理や、解決のための総合知として捉え直し、発表を重ねた。

また、救急車の適正利用問題をめぐる市民的实践においても、情報の提供や注意喚起ではなく、社会的判断をいかに共鳴的に生成できるかという視点から、言葉・デザイン・制度の再構成を行った。これは、単なる規範の普及ではなく、状況ごとの「共に感じ、共に迷う」ことへの支援としてのレジリエンスであり、固定的なルールよりも動的な倫理感覚の涵養に視座を置いた。

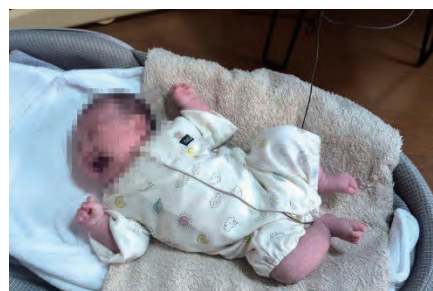
さらに、公共空間においても同様にとらえ、「排除の兆

し」や「倫理的ズレ」に着目し、それを回避するのではなく、倫理的感受性の学習機会として捉えるアプローチを試みている。ベンチの仕切りやトイレ表示、ユニバーサルデザインの適用限界など、日常的な構造を「問い直しの場」として再編成するデザイン実践を行った。

レジリエンスデザインは、動的倫理における社会的共鳴の場を設計する試みへと拡張し、レジリエンスデザインとケアデザインの表裏一体性についても考えている。それは、「何が正しいか」を一義的に定めるのではなく、「どのように共に考え、感じ、判断しうるか」という問いを社会に埋め込む営みである。変動する社会における新たな共感回路の設計として、今後も機能的・制度的展開を見据えながら継続していく。

赤ちゃんの鎮静反応の解明とそれを応用した育児負担軽減プロダクトの創出及び社会実装（藤智亮）

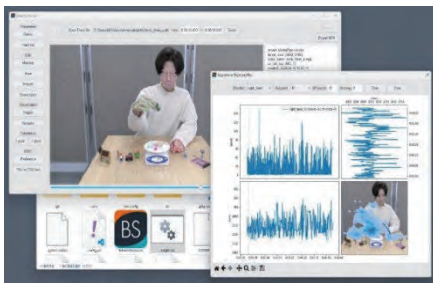
科研費基盤研究（B）の研究課題として取り組んでいる。ヒトは子をみんなで育てる動物であるが、現代の核家族社会では夫婦は二人だけでの子育てを強いられ、特に母親への負担は非常に大きい。本研究ではこの問題に対応し、母親が育児においてもっとも負担感を感じている赤ちゃんの寝かしつけに有用なプロダクトを創出し、さらにそれを社会実装する。2024年度は研究初年度で、乳児の「リラックスーストレス状態」の評価方法を検討している。今後は得られた知見をもとに、適切な刺激で乳児を睡眠に誘うプロダクトを提案・設計・製作し、さらに評価実験を通してその有用性を検証する予定である。



2024年度に行った実験の様子

行動観察支援アプリケーションの開発（西村英伍）

人のレジリエンスを定量的に記述する方法の一つに、Behavior coding という手法がある。Behavior coding とは、人の行動をあらかじめ分類し、それぞれの行動がどのタイミングで、どの程度の頻度で観察されたかを記録する方法である。この手法は、行動を定量化できる点から、生産管理や教育現場などの分野で活用されてきた。しかし、観察者に一定のスキルや経験が求められるうえ、レジリエンスのように観察期間が長く、コンテキストが複雑な対象では観察者の負担が大きく、実施が困難である。そこで、Behavior coding の合理化を目的として、画像処理 AI を応用した Feature-based Behavior Coding (FBBC) という手法を考案し、「Behavior Senpai」という名称のアプリケーションを開発した。



アプリケーションの外観

子どもの権利を学ぶワークショップ「きかせてジャーニー」企画制作（田北雅裕）

基本的な権利である「子どもの権利」は、全ての子どもが生きていく上で絶対に必要なものである。しかし、子ども自身による学びの場は少ない。そんな中、NPO 法人子どもアドボカシーセンター福岡から、子どもの感性や思考に寄り添いながら、学校現場や公民館等で活用できる新たな学習教材の企画開発を依頼され、調査に取り組み、企画制作を行った。

きかせてジャーニーは、子どもが「自分の声をあらし、お互いの声をきき合う」体験を通して、学校生活や日常生活における「子どもの権利」を楽しく学習することができるワークショップキットである。キットを用いたワークは3種類あり、学校現場や地域の実情にあわせて自由に組み合わせ、柔軟なプログラムづくりが可能である。第18回キッズデザイン賞受賞。



ワークショップキット「きかせてジャーニー」

集団過程の社会心理学研究（縄田健悟）

縄田は、集団過程の社会心理学研究を行ってきた。集団暴力や集団間紛争に関しては、集団規模と暴力犯罪との関連性を『Asian Journal of Criminology』誌にて発表した。また、ネオリベラル信念と社会的・政治的態度との関連性を検討した研究、さらに、敵味方分断思考と陰謀論的信念および国際関係に関する政治的態度との関係を分析した論文を発表している。加えて、組織のチームワークに関する論文を複数刊行し、内2本が日本心理学会および日本社会心理学会の優秀論文賞を受賞した。さらに、一般読者に向けて『だけどチームがワークしない』（日経 BP）を出版し、実践的知見を社会に展開した。

受賞関連

- ・ 日本心理学会 2024年度 優秀論文賞（縄田健悟・池田浩・青島未佳・山口裕幸）、2024年7月
- ・ 日本社会心理学会 2024年度 優秀論文賞（縄田健悟・池田浩・青島未佳・山口裕幸）、2024年8月
- ・ フォスタリングカードキット「TOKETA」、第18回キッズデザイン賞・審査委員長特別賞受賞、2024年10月
- ・ 子どもの権利を学ぶワークショップキット「きかせてジャーニー」、第18回キッズデザイン賞受賞、2024年10月

構成員研究業績一覧 (2023 – 2024 年)

前田享史

【論文】

Nishimura T, Motoi M, Toyoshima H, Kishida F, Shin S, Katsumura T, Nakayama K, Oota H, Higuchi S, Watanuki S, Maeda T. Endocrine, inflammatory and immune responses and individual differences in acute hypobaric hypoxia in lowlanders, *Scientific reports*, 13, 12659, 2023, 10.1038/s41598-023-39894-w.

Maeda T, Koga H, Nonaka T, Higuchi S. Effects of bathing-induced changes in body temperature on sleep, *Journal of Physiological Anthropology*, 42, 20, 2023, 10.1186/s40101-023-00337-0.

Sunarno SDAM, Sedilla KB, Nishimura T, Maeda T. Overview of Sleep and Fatigue at Indonesian Coal Mining Workers Working with Shift Work, *Engineering Headway*, 6, 261-266, 2024, 10.4028/p-oRoUx1.

Ishida Y, Matsushita M, Yoneshiro T, Saito M, Fuse S, Hamaoka T, Kuroiwa M, Tanaka R, Kurosawa Y, Nishimura T, Motoi M, Maeda T, Nakayama K. Genetic evidence for involvement of β 2-adrenergic receptor in brown adipose tissue thermogenesis in humans, *International Journal of Obesity*, 48, 8, 1110-1117, 2024, 10.1038/s41366-024-01522-6.

【学会発表】

<国際発表>

Ilham Bakri, Megasari Kurnia, Nadzirah Ikasari Syamsul, Retnari Dian Mudiastuti, Zakiah Novacastry Niswar, Sahdan, Fadylah Daud, A M Imam Arief Riandika, Takafumi Maeda. The Effects of Air Conditioner (AC)-Induced Bedroom Temperature Variations on the Physiological Responses and Sleep Quality of the Elderly Male Group in Indonesia, the 20th International Conference on Environmental Ergonomics, 2024 年 6 月.

Keneth Bautista Sedilla, Keita Shiragami, Shun Ishibashi, Fumi Kishida and Takafumi Maeda. Relationship Between Peripheral Vascular Flexibility and Total Peripheral Resistance During Head-up Tilt and Passive Heat Exposure, the 20th International Conference on Environmental Ergonomics, 2024 年 6 月.

Midori Motoi, Keneth Sedilla, Gen Aonuma, Shun Ishibashi, Shigeyuki Inoue, Takafumi Maeda. Individual Differences in Thermoregulatory Responses to Thermal Environment, The 16th International Congress of Physiological Anthropology, 2023 年 9 月.

Takayuki Nishimura, Midori Motoi, Hideo Toyoshima, Fumi Kishida, Sora Shin, Takafumi Katsumura, Kazuhiro Nakayama, Hiroki Oota, Shigekazu Higuchi, Shigeki Watanuki, Takafumi Maeda. Physiological Responses and Individual Differences in Acute Hypobaric Hypoxia in Lowlanders, The 16th International Congress of Physiological Anthropology, 2023 年 9 月.

Takafumi Maeda. Effects of bathing-induced changes in body temperature on sleep, *Kansei Science and Physiological Anthropology in Japan: Encountering Clothing and Fashion*, 2023 年 9 月.

Stevan Deby Anbiya M. SUNARNO, Keneth B. SEDILLA, Takayuki NISHIMURA, Takafumi MAEDA. Overview of Sleep and Fatigue at Indonesian Coal Mining Workers Working with Shift Work, 6th International Conference on Science and Engineering, 2023 年 8 月.

<国内発表>

前田享史. 快適環境と適応能, 九州大学大学院芸術工学研究院附属応用生理人類学研究センター 10 周年記念シンポジウム「未来の環境と人」, 2024 年 12 月.

前田享史. ヒトの生活・環境と健康・適応能, 九州大学の気候変動関連研究とその先へ, 2024 年 12 月.

堀田駿, 藤原新, 瀧亮太, 遠藤麻琴, 堀内扇流, 矢野智志, 石橋駿, 河野陽介, Keneth Sedilla, 西村貴孝, 前田享史. 局所冷刺激が起立性循環調節反応に及ぼす影響, 日本生理人類学会第 85 回大会, 2024 年 6 月

林瑞生, 西村貴孝, 本井碧, 中山一大, 有馬弘晃, 太田博樹, 小川元之, 前田享史, 勝村啓史. 反復低圧低酸素曝露によって起こす遺伝子発現と生理的变化, 日本生理人類学会第 85 回大会, 2024 年 6 月

松尾沙也加, 河野陽介, 三浦凜風, 名倉堯哉, 前田享史, 西村貴孝. 微小な気圧の変化がヒトの生理反応に及ぼす影響, 日本生理人類学会第 85 回大会, 2024 年 6 月

前田享史, 古賀弘子, 野中隆, 樋口重和. 入浴による体温変化が睡眠に及ぼす影響, 日本生理人類学会第 84 回大会, 2023 年 6 月

河野陽介, 中林暉裕, 松尾沙也加, 前田享史, 西村貴孝. 登山経験が低圧環境での運動負荷に対する生理応答に与える影響, 日本生理人類学会第 84 回大会, 2023 年 6 月

Keneth B. SEDILLA, Takafumi MAEDA. Subjective thermal perceptions and autonomic thermoregulatory responses preceding thermal behavior initiation during low-intensity cycling exercise in the humid heat, 日本生理人類学会第 84 回大会, 2023 年 6 月

Stevan Deby Anbiya M. SUNARNO, Keneth B. SEDILLA, Takayuki NISHIMURA, Takafumi MAEDA. Overview of Sleep Quality Based on Shift Rotation in Indonesian Coal Mining Services Company, 日本生理人類学会第 84 回大会, 2023 年 6 月

青沼弦, 石橋駿, 前田享史. 温熱環境に対する体温調節反応の個人差についての研究, 日本生理人類学会第 84 回大会, 2023 年 6 月

近藤勲, 高田暁, 古賀弘子, 森千葉津, 前田享史. 入浴中の深部温予測を目的とした人体熱モデルの適用範囲, 第 47 回人間-生活環境系シンポジウム, 2023 年 11 月

【その他】

<受賞>

3rd Winner of Doctoral Student Paper Competition, Stevan Deby Anbiya Muhamad Sunarno, The 6th International Conference on Science and Engineering, 2023 年 8 月

西村貴孝

【論文】

Wakabayashi H, Sakaue H, Nishimura T. Recent updates on cold adaptation in population and laboratory studies, including cross-adaptation with nonthermal factors, *Journal of Physiological Anthropology*, 44, 7, 2025, 10.1186/s40101-025-00387-6.

Nishimura T, Loh PY, Tomita Y, Ng TKS, Maeda T. Urinary pentosidine as a potential biomarker of muscle and physical performance in young adult men, *Journal of Physiological Anthropology*, 43, 29, 2024, 10.1186/s40101-024-00376-1.

Arima H, Nishimura T, Koirala S, Nakano M, Ito H, Ichikawa T, Pandey K, Pandey BD, Yamamoto T. Sex differences in genotype frequency and the risk of polycythemia associated with rs13419896 and rs2790859 among Tibetan highlanders living in Tsarang, Mustang, Nepal, *Journal of Physiological Anthropology*, 43, 2024, 10.1186/s40101-024-00372-5.

Suiko M, Mizukami S, Arima K, Nakashima H, Nishimura T, Tomita Y, Abe Y, Tanaka N, Honda Y, Kojima M, Okawachi T, Hasegawa M, Sou Y, Tsujimoto R, Kanagae M, Osaki M, Aoyagi K. Association between physical performance and bone mass in community-dwelling

postmenopausal Japanese women: The Unzen study, Plos one, 19, e0296457, 2024, 10.1371/journal.pone.0296457.

Ishida Y, Matsushita M, Yoneshiro T, Saito M, Fuse S, Hamaoka T, Kuroiwa M, Tanaka R, Kurosawa Y, Nishimura T, Motoi M, Maeda T, Nakayama K. Genetic evidence for involvement of β 2-adrenergic receptor in brown adipose tissue thermogenesis in humans, International Journal of Obesity, 48, 8, 1110-1117, 2024, 10.1038/s41366-024-01522-6.

Nishimura T, Motoi M, Toyoshima H, Kishida F, Shin S, Katsumura T, Nakayama K, Oota H, Higuchi S, Watanuki S, Maeda T. Endocrine, inflammatory and immune responses and individual differences in acute hypobaric hypoxia in lowlanders, Scientific Reports, 13, 13682, 2023, 10.1038/s41598-023-40794-2.

Okada C, Iso H, Yamagishi K, Ikeda A, Umesawa M, Muraki I, Yasuda N, Kato T, Saito I, Arima K, Nishimura T, Tanno K, Sakata K, Goto A, Yamaji T, Iwasaki M, Shimazu T, Inoue M, Sawada N, Tsugane S. Dietary behaviours and related lifestyles according to the presence or absence of skipping breakfast in Japanese adults: the JPHC-NEXT study, Public Health Nutrition, 26, 6, 1230-37, 2023, 10.1017/S136898023000010.

Okawachi T, Arima K, Mizukami S, Koto S, Suiko M, Kit A, Nakashima H, Uchiyama M, Honda Y, Tanaka N, Tsujimoto R, Nishimura T, Tomita Y, Abe Y, Kusano Y, Kawashiri S-Y, Tamai M, Yamanashi H, Nagata Y, Kawakami A, Maeda T, Aoyagi K. Association between mental health and bone mass among community-dwelling adults: Nagasaki Islands Study on bone health, Acta Medica Nagasakiensia, 66, 2, 81-83, 2023, 10.11343/amn.66.81.

【学会発表】

<国際発表>

Higuchi S, Sato A, Ohashi M, Eto T, Nishimura T, Yasukochi Y, Nakayama K, Oota H. Association of MTNR1B polymorphisms with glucose tolerance after one night of simulated night shift, Journal of sleep research, 33, 2024年9月

Jundai Fukuda, Jun-ya Takakura, Kazuaka Oka, Takayuki Nishimura, Hitoshi Wakabayashi. A Surveillance Study on Actual Situation and Factors of Air Conditioner Non-Use in the Elderly in Japan for Heat Stroke Prevention, The 20th International Conference on Environmental Ergonomics, 2024年6月

Takayuki Nishimura, Midori Motoi, Hideo Toyoshima, Fumi Kishida, Sora Shin, Takafumi Katsumura, Kazuhiro Nakayama, Hiroki Oota, Shigekazu Higuchi, Shigeki Watanuki, Takafumi Maeda. Physiological Responses and Individual Differences in Acute Hypobaric Hypoxia in Lowlanders, The 16th International Congress of Physiological Anthropology, 2023年9月

Stevan Deby Anbiya M. SUNARNO, Keneth B. SEDILLA, Takayuki NISHIMURA, Takafumi MAEDA. Overview of Sleep and Fatigue at Indonesian Coal Mining Workers Working with Shift Work, 6th International Conference on Science and Engineering, 2023年8月

<国内発表>

若林 齊, 福田純大, 高倉潤也, 岡和孝, 西村貴孝. 首都圏の高齢者および若中年者を対象とした Web 調査に基づく夏期冷房忌避の要因分析, 第 78 回日本体力医学会大会, 2024 年 9 月

林瑞生, 西村貴孝, 本井碧, 中山一大, 有馬弘晃, 太田博樹, 小川元之, 前田享史, 勝村啓史. 反復低圧低酸素曝露によって起こる遺伝子発現変動と生理的変化, 日本生理人類学会第 85 回大会, 2024 年 6 月

三浦凜風, 曾我浩二, 本井碧, 中林暉裕, 松尾沙也加, 伊藤貴士, 西村貴孝. 入浴が月経前症候群に及ぼす影響に関する基礎的研究, 日本生理人類学会第 85 回大会, 2024 年 6 月

堀田駿, 藤原新, 瀧亮太, 遠藤麻琴, 堀内扇流, 矢野智志, 石橋駿, 河野陽介, Keneth SEDILLA, 西村貴孝, 前田享史. 局所冷刺激が起立性循環調節反応に及ぼす影響, 日本生理人類学会第 85 回大会, 2024 年 6 月

濱上聖也, 西村貴孝, Loh Ping Yeap. e スポーツゲーム中級者の上半身における筋持久力がゲームプレイに与える影響, 日本生理人類学会第 85 回大会, 2024 年 6 月

松尾沙也加, 河野陽介, 三浦凜風, 名倉堯哉, 前田享史, 西村貴孝. 微小気圧の変化がヒトの生理反応に及ぼす影響, 日本生理人類学会第 85 回大会, 2024 年 6 月

西村貴孝, 高倉潤也, 松尾沙也加, 福田純大, 三浦凜風, 富田義人, Loh Ping Yeap, 若林齊, 岡和孝. 高齢者の認知機能及び温度感受性がエアコン使用時間に与える影響に関する研究, 日本生理人類学会秋期フロンティアミーティング, 2024 年 11 月

松尾沙也加, 三浦凜風, 富田義人, Loh Ping Yeap, 福田純大, 若林齊, 岡和孝, 高倉潤也, 西村貴孝. 若年者及び高齢者における温度感受性と寒暖差による心身の不調との関連について, 日本生理人類学会秋期フロンティアミーティング, 2024 年 11 月

三浦凜風, 曾我浩二, 本井碧, 伊藤貴士, 有馬和彦, 西村貴孝. 夏季における入浴習慣と PMS 症状の関連についてのアンケート調査, 日本生理人類学会秋期フロンティアミーティング, 2024 年 11 月

河野陽介, 西村貴孝, 前田享史. 呼吸数の統制が低圧下での生理機能に及ぼす影響, 日本生理人類学会秋期フロンティアミーティング, 2024 年 11 月

中林暉裕, 曾我浩二, 河野陽介, 三浦凜風, 伊藤貴士, 西村貴孝. 日常の入浴習慣が入浴中の体温調節反応の個人差に与える影響, 日本生理人類学会第 84 回大会, 2023 年 6 月

河野陽介, 中林暉裕, 松尾沙也加, 前田享史, 西村貴孝. 登山経験が低圧環境での運動負荷に対する生理応答に与える影響, 日本生理人類学会第 84 回大会, 2023 年 6 月

Stevan Deby Anbiya M. SUNARNO, Keneth B. SEDILLA, Takayuki NISHIMURA, Takafumi MAEDA. Overview of Sleep Quality Based on Shift Rotation in Indonesian Coal Mining Services Company, 日本生理人類学会第 84 回大会, 2023 年 6 月

新田 智也, 中村 駿太郎, 西村 貴孝, 若林 齊. 暑熱環境における体温調節応答と質問紙による主観的暑熱耐性の関係, 第 47 回人間 - 生活環境系シンポジウム報告集 p71-72, 2023 年 11 月

Arima K, Koto S, Okawachi T, Nakashima H, Miyata J, Hasegawa M, Tomita Y, Nishimura T, Mizukami S, Akahoshi E, Kanagae M, Tamai M, Abe Y, Aoyagi K. 地域住民の心理的苦痛と骨の健康, 第 82 回日本公衆衛生学会総会抄録集 p577, 2023 年 10 月

【その他】

<受賞>

2023 年度, 一般社団法人日本生理人類学会・優秀研究賞, 西村貴孝, 2024 年 3 月

日本生理人類学会秋期フロンティアミーティング・優秀発表賞, 三浦凜風, 2024 年 11 月

日本生理人類学会第 84 回大会・優秀発表賞, 中林暉裕・2023 年 6 月

<メディア掲載>

日本経済新聞・入浴習慣、発汗機能を向上か リンナイと九大が研究結果 <https://www.nikkei.com/article/DGXZQOFD262TO0W3A620C2000000/>

伊藤浩史

【論文】

Kobayashi Y, Kudo K, Kobayashi T, Kinoshita H, Bang H, Ito H, Kishimura A, Matsumoto Y, Miwa M, Unoki M, Yoshioka T. Low awareness but high willingness to engage in science communication: a cross-disciplinary survey study in a Japanese university, Scientometrics, 2025, 10.1007/s11192-025-05251-z.

杉琢磨, 伊藤浩史. 線虫を通じて知るアクティブマターの物理, 応用物理, 94, 3, 151-155, 2025, 10.11470/oubutsu.94.3_151.

関元秀, 梶庭高, 伊藤浩史. 最適化からみた概日時計, 時間生物学会誌, 30, 2, 113-121, 2024.

Okada M, Ito H. Phase characteristics of vocal tract filter can distinguish speakers, 9, 2023, 10.3389/fams.2023.1274846.

Kaji H, Mori F, Ito H. Enhanced precision of circadian rhythm by output system, *Journal of Theoretical Biology*, 574, 111621, 2023, 10.1016/j.jtbi.2023.111621.

Imamura R, Nakane Y, Jiajing H, Ito H, Sugi T. The large-scale cultivation of nematodes to study their collective behaviors, *Journal of Visualized Experiments*, 198, e65569, 2023, 10.3791/65569.

Uemoto K, Mori F, Yamauchi S, Kubota A, Takahashi N, Egashira H, Kunimoto Y, Araki T, Takemiya A, Ito H, Endo M. Root PRR7 Improves the Accuracy of the Shoot Circadian Clock through Nutrient Transport, *Plant Cell Physiology*, 64, 352-362, 2023, <https://doi.org/10.1093/pcp/pcae026>.

【学会発表】
<国際発表>

Ito H. Fluctuations in the cellular circadian rhythms MathBio Workshop, 2025 年 3 月

Ishihara A, Kaji H, Obu S, Ito H, Exploration of cold-tolerant circadian rhythm in cyanobacteria, *Quantitative Microbiology Symposium*, 2025 年 3 月

Kaji H, Mori F, Ito H. Optimizing periodic regulation to enhance precision in the circadian clock system, *Quantitative Microbiology Symposium*, 2025 年 3 月

Ito H. 西北農林科技大学・獣医学部・特別講義, 2023 年 12 月.

Haruna U, Kozuma T, Hase S, Nitasaka E, Oyama T, Ito H. Circadian rhythm of two strains of morning glory with different flowering times, *Plant and Chronobiology Talks for Youth*, 2023 年 11 月

Ito H. Cellular circadian rhythm can be more precise through output, *International Conference on "Self-organization in Life and Matter"*, 2024 年 9 月.

Ito H, Observation of Circadian Rhythms of Non-model Plants via Gene Gun *Plant and Chronobiology Talks for Youth*, 2023 年 11 月

Ito H. Fabrication of biological oscillators and patterns, *The 11th International Symposium on Adaptive Motion of Animals and Machines*, 2023 年 6 月.

Ito H. Cellular individuality in cyanobacterial circadian rhythm, *Joint annual meeting of the Korean Society for Mathematical Biology and the Society for Mathematical Biology*, 2024 年 6 月.

<国内発表>

伊藤浩史. 概日リズムの正弦波的制御はノイズを小さくする, *定量生物の会*, 2025 年 1 月

山田のぞみ, 伊藤浩史, 池田周平, 奥泉和也, 清水正宏. キャノンボールジェリーフィッシュの遊泳リズムの同期現象, *定量生物の会・九大キャラバン* 2025 年 1 月

梶穂高, 森史, 丸山修, 伊藤浩史. 概日リズムの正弦波的制御はノイズを小さくする, *定量生物の会・九大キャラバン* 2025 年 1 月

山田悠介, 加藤雄太郎, 深作亮也, 伊藤浩史. ネガティブフィードバックループの非緩和性, *定量生物の会・九大キャラバン* 2025 年 1 月

伊藤浩史. ケンサキイカ色素胞リズムを制御する, *動物学会*, 2024 年 9 月

伊藤浩史, 清水正宏. クラゲの同期, 第 2 回ソフトロボットシンポジウム 2024 年 6 月

伊藤浩史. 生物リズムをはかる, つくる, 制御する 第 9 回 分子サイバネティクス/第 53 回 分子ロボティクス 定例研究会セミナー 2024 年 5 月

伊藤浩史. クラゲ拍動リズムの同期, *九州山口沖縄リズム研究会*, 2024 年 4 月

伊藤浩史. 生物のなみなみをつくる, 制御する, *ブレインウェア研究会*, 2023 年 12 月

Ito H. Fabrication of Biological Rhythms and Patterns, *ReCAPS 10th Anniversary Seminar*, 2023 年 11 月

伊藤浩史. 時間生物学と微分幾何学の融合による波形データ解析手法の提案, *学術変革 A「データ記述科学」領域会議*, 2023 年 9 月

Ito H. Circadian output can enhance precision, *日本時間生物学会*, 2023 年 9 月

鍵山京佳, 伊藤浩史. 光合成を行わない細菌の概日リズムの可能性, *時間生物学会年会*, 2023 年 9 月

梅津晏奈, 上妻多紀子, 長谷颯太, 仁田坂英二, 小山時隆, 伊藤浩史. 開花時刻の異なる 2 系統のアサガオの概日リズム, *日本時間生物学会*, 2023 年 9 月

富永直, 今井圭子, 伊藤浩史. 高速分裂するシアノバクテリアの概日リズム, *時間生物学会年会*, 2023 年 9 月

梶穂高, 森史, 伊藤浩史. 概日時計ゆらぎ機能のデザイン, *時間生物学会年会*, 2023 年 9 月

伊藤浩史. 時計の針とゆらぎ, *CyanoClock 4.0*, 2023 年 6 月

【その他】

<受賞>

日本時間生物学会第 31 回・優秀演題賞, 梶穂高・2024 年 10 月

瀬口典子

【論文】

北原モコトウナン, 太田好信, 瀬口典子, 辻康夫, 松島泰勝, 池田光徳, 富山一郎, 加藤博文. 一般向けリーフレット『先住民遺骨問題の解決を目指して』, *科研費 基盤研究 A(令和 2 年度~6 年度)研究成果リーフレット*, P6(全 10 ページ), 2025 年 3 月

Seguchi N. "Pacific Paradox" Revisited: Using Osteometric Data. *Proceedings of an International Conference in Hawai'i, the USA March 02-03, 2023 "Trekking Shores, Crossing Water Gaps, and Beyond: Maritime Aspects in the Dynamics of "Out of Eurasia" Civilizations."* Goto A, Matsumoto N, (Eds), Okayama University. 2024, ISBN:978-4-910223-19-3 (Print edition), 978-4-910223-20-9 (Online edition).

瀬口典子. Ending remarks : コメント【シンポジウムの記録・8】国際シンポジウム「まじゅん、語やびら!!——世界の遺骨返還問題と脱植民地化を考える」, *アイヌ・先住民研究 Aynu teetawanoankur kanpinuyé* (4) p. 253-254. ISSN 2436-1763, 第 4 号, p253-254, 2024, 10.14943/Jais.4.255.

Seguchi N, Best K. Short time, big impacts: lessons, legacies, and future directions based on the work of Stephen D. Ousley, *Forensic Anthropology*. University of Florida Press, Vol.7, Nos.2-3, p75-81, 2024, 10.5744/fa.2023.0027.

瀬口典子. 脱人種主義・脱植民地主義時代の生物人類学 : 21 世紀の生物人類学の新たな挑戦, *生物史学研究 (The Japanese Journal of the History of biology)*, No.104, p8-19, 2024, ISBN 0386-9539.

瀬口典子. 人種概念構築の歴史と生物人類学における頭蓋骨多様性研究の進展, *現代思想*. 青土社, Vol. 52-14, #10, p33-44, 2024, ISBN 978-4-7917-1471-1C9410.

瀬口典子. B03 班活動報告書: 集団の拡散と文明形成に伴う遺伝的多様性と身体的変化の解明, *出ユーラシアの統合的人類学—文明創出メカニズムの解明—出ユーラシア・プロジェクト*, 2023 年度研究活動報告書第 16 集, P.91-110, 2024.

Seguchi N, Loftus JF III, Yonemoto S, Murphy MM. Investigating intentional cranial modification: A hybridized two-dimensional/three-dimensional study of the Hirota site, Tanegashima, Japan. *PLOS ONE*, 18, 8, e0289219, 2023, 10.1371/journal.pone.0289219.

瀬口典子 他. 特集 古代ゲノム学と医学の交差点. 企画&序文, 医学のあゆみ 医歯薬出版, Vol. 286, No. 4, p247-247 (全特集 : p274 -281), 2023 年 7 月, ISSN 0039-2359.

瀬口典子. B03 班活動報告書: 集団の拡散と文明形成に伴う遺伝的多様性と身体的変化の解明, 出ユーラシアの統合的人類史学—文明創出メカニズムの解明—出ユーラシア・プロジェクト, 2022 年度研究活動報告書第 13 集, p151-180, 2023.

【学会発表】

<国際発表>

Seguchi N, Hayashi A. Discussions of ethical considerations in the utilization of unpublished legacy data to benefit descendant communities: the case of Japan. In Invited Symposium: "An Open Debate on the Analysis of Legacy Data from Human Skeletal Remains.", The 94th Annual meeting of American Association of Biological Anthropologists. Baltimore, MD, USA, 2025 年 3 月

Loftus, JF, Yonemoto S, Murphy MM, Seguchi N, An ancient cranial enigma: 2D/3D analysis of cranial modification at the Hirota site, Japan. 30Th European Association of Archaeologists Annual Meeting. Rome, Italy, 2024 年 8 月

Seguchi N. The current status of the repatriation of human remains in Japan: Implications of ignoring colonial and racial history. In A session "Repatriation as decolonial praxis for social justice: A report from Japan", 2024 American anthropological Association Annual Meeting. Tampa Conference Center, Tampa, Florida, USA, 2024 年 11 月

Hasuda N, Seguchi N. Analysis of Fluctuating Asymmetry of mandibular morphology using interlandmark distances and landmark-based-3DGM: A study on 3D mesh models of Japanese human remains from the 19th and 20th centuries In Invited symposium "Archiving and Sharing Craniofacial data: from 1D to 3D and beyond" (Organizers: Seguchi, Noriko and Ousley, Stephen. Chair: Seguchi, Noriko), The 92nd Annual meeting of American Association of Biological Anthropologists. Reno Nevada, USA, American Journal of Biol Anthropology, 180 S75: 72, 2023 年 4 月

Seguchi N, Yonemoto S, Loftus JF, The Kyushu University Museum skeletal collection 3D surface scan Sharing Project and related ethical considerations. In Invited symposium "Archiving and Sharing Craniofacial data: from 1D to 3D and beyond"(Organizers: Seguchi, Noriko and Ousley, Stephen. Chair: Seguchi, Noriko), The 92nd Annual meeting of American Association of Biological Anthropologists. Reno Nevada, USA American Journal of Biol Anthropology, 180 S75: 159-160, 2023 年 4 月

<国内発表>

水野文月, 舟橋京子, 米元史織, 瀬口典子, 山田孝, 林美千子, 熊谷真彦, 田中真生, 黒崎久仁彦, 植田信太郎. 近世の埋葬人骨に付着した植物片の DNA 分析, 日本文化財科学会第 41 回大会, 2024 年 7 月

Seguchi N. The Problem of the Concept of Race and Racism in Japan (瀬口典子. 人種概念の問題点と日本における人種差別), 第 3 回 Kyushu U Connect : How can diversity guide our science and society? 十人十色—多様性がみちびく私たちの未来とは? 福岡市博物館講堂, 2024 年 7 月

瀬口典子. オーガナイザーセッション 2 「ドメスティケーションと共進化」, 第 10 回全体会議 : 出ユーラシアの統合的人類史学 : 文明創出のメカニズムの解明, 岡山大学文法経講義棟 10 番講義室, 2024 年 3 月

栗山佑基, 水野文月, 中伊津美, 澤浦亮平, 坂上和弘, 金澤英作, 米元史織, 舟橋京子, 瀬口典子, 片桐千亜紀, 佐宗亜衣子, 奈良貴史, 松下真実, 松下孝幸, 山田孝, 林美千子, 黒崎久仁彦, 植田信太郎, 大橋順. 歯石を用いた古代日本における歯周病関連菌の系統解析, 日本 DNA 多型学会 第 33 回学術集会, 2024 年 11 月

栗山佑基, 水野文月, 中伊津美, 澤浦亮平, 坂上和弘, 金澤英作, 米元史織, 舟橋京子, 瀬口典子, 片桐千亜紀, 佐宗亜衣子, 奈良貴史, 松下真実, 松下孝幸, 山田孝, 林美千子, 黒崎久仁彦, 植田信太郎, 大橋順. 古代日本におけるヒト口腔内細菌叢の解析, 第 78 回日本人類学会大会, 2024 年 10 月

瀬口典子. 遺骨の倫理的取り扱いと子孫のコミュニティとの共同研究における議論と課題 : アメリカ合衆国の事例. 一般シンポジウム「アイヌ研究と研究倫理」, 第 78 回人類学会大会, 東北大学, 2024 年 10 月

瀬口典子. シンポジウム・エンディングコメント, 国際シンポジウム「まじゅん、語やびら!!——世界の遺骨返還問題と脱植民地化を考える」沖縄県立博物館美術館, 2023 年 7 月

蓮田賀子, 瀬口典子. 近世の九州における口腔衛生状況の集団差の検討, 第 77 回日本人類学会大会, 東北大学, 2023 年 10 月

【その他】

<メディア掲載>

瀬口典子. アイヌ・琉球民族の遺骨「盗掘」かたくなに謝罪しない学会の言い分「先住民族」を尊重しない人類学の傲慢, 東京新聞, <https://www.tokyo-np.co.jp/article/374138>, 2024 年 12 月 18 日

瀬口典子. How studying ancient humans tells us about us today(古代人の研究から現代を読み解く), Kyushu U Science Salon #5. (English), 九大広報, <https://www.youtube.com/watch?v=Vlb8FvKEj8s>, 2024 年 6 月 27 日

瀬口典子. こちら特捜部 遺骨問題「反省」だけで「謝罪」なし 謝罪もせず「研究させる」とは何事か アイヌ民族と研究者の初対話から考えた「知りたい欲求」が持つ暴力性, 東京新聞, <https://www.tokyo-np.co.jp/article/322683>, 2024 年 4 月 22 日

瀬口典子. こちら特捜部 盗掘した側が「申請手続き」を強いるなんて, 東京新聞, 2023 年 11 月 26 日

瀬口典子. 略奪文化財のいま④ 収蔵の遺骨返還なお遠く米では先住民と共同研究, 日本経済新聞, 2023 年 6 月 29 日

瀬口典子. こちら特捜部 日本の人類学「脱植民地化」に逆行, 東京新聞, 2023 年 5 月 14 日

PLOS ONE の論文 "Investigating intentional cranial modification: A hybridized two-dimensional/three-dimensional study of the Hirota site, Tanegashima, Japan." の報道がオンライン・新聞・雑誌において 7 0 以上掲載された。以下、一部抜粋。

These Ancient Japanese Islanders Created a Signature Skull Shape by Molding Babies' Heads. <https://www.smithsonianmag.com/smart-news/ancient-japanese-islanders-created-a-distinctive-skull-shape-by-deforming-babies-heads-180981697/>, Smithsonian Magazine, 2023 年 8 月 21 日

Long-standing mystery of modified human skulls in ancient Japan solved by new analysis. <https://edition.cnn.com/2023/08/18/world/japan-hirota-skull-modification-scen/index.html>, CNN, 2023 年 8 月 19 日

Unveiling Japan's ancient practice of cranial modification: The case of the Hirota people in Tanegashima. <https://www.eurekalert.org/news-releases/993350>, Eurekalert !, 2023 年 8 月 16 日

村木里志

【論文】

Flores HS, Yeoh WL, Loh PY, Morinaga K, Muraki S. Biomechanical Analysis of Recreational Cycling with Unilateral Transtibial Protheses. Prosthesis, 5(3), 733-751; <https://doi.org/10.3390/prosthesis5030052>, 2023

Yeoh WL, Choi J, Loh PY, Fukuda O, Muraki S. Motor Characteristics of Human Adaptations to External Assistive Forces. Journal of Robotics and Mechatronics, 35(3), 547-555; <https://doi.org/10.20965/jrm.2023.p0547>, 2023

Choi J, Loh PY, Muraki S. Transient Electromyographic Responses by Isokinetic Torque Release during Mechanically Assisted Elbow Flexion. Journal of Human Kinetics, 90, 17-28; <https://doi.org/10.5114/jhk/169368>, 2024

Mariano L, Loh PY, Ishihara Y, Choi J, Muraki S. Evaluating Musculoskeletal Discomfort in Esports: A Focus on Competitive and Recreational Players From the Philippines and Japan. *Journal of Electronic Gaming and Esports*, 2(1), 1-10 ; <https://doi.org/10.1123/jege.2023-0035>, 2024

Phuaklikhit C, Junsri T, Seiji S, Muraki S, Loh PY. Biomechanical and physiological variables in dynamic and functional balance control during single leg loading in individuals with chronic ankle instability: a scoping review. *Sports*, 12(8), 224; <https://doi.org/10.3390/sports12080224>, 2024

Studiyaniti L, Afiah I, Loh PY, Muraki S. The Health Benefits of Cooking Influencing the Quality of Life for the Older Generation: A Systematic Review. *Aging Medicine and Healthcare*, 10.33879/AMH.XXX.2024.04012, In press, 2024

Yang Y, Yeoh WL, Choi J, Luecha T, Loh PY, Muraki S. Effects of control parameters of wearable robotics on muscle activity during assisted elbow flexion. *International Journal of Industrial Ergonomics*, 104, 103660; <https://doi.org/10.1016/j.ergon.2024.103660>, 2024

Flores HS, Yeoh WL, Loh PY, Morinaga K, Muraki S. Biomechanical effects of saddle height changes in leisure cycling with unilateral transtibial prostheses: A simulated study. *PLoS ONE*, 20(1), e0317121; <https://doi.org/10.1371/journal.pone.0317121>, 2025

村木里志, 至極三保子, 中島弘貴, Choi J, 内田慎吾, 南雲陽一. 眠気・リラクセス感を誘う揺れるチェアの開発. *人間工学*, 59(1), 3-12; <https://doi.org/10.5100/jje.59.3>, 2024

藤原 ののか, 村木 里志. 座位での机上うつ伏せ姿勢の体幹起立角度の違いが圧迫感および安定感に及ぼす影響. *人間工学*, 59(1), 29-33; <https://doi.org/10.5100/jje.59.29>, 2024

村木里志, Choi J, Yeoh WL, Yang Y, 森永浩介, Loh PY, 福田修. 身体動作拡張テクノロジーの人間工学リサーチ・イシュー. *人間工学*, 59(4), 141-147; <https://doi.org/10.5100/jje.59.141>, 2024

【学会発表】

<国際発表>

Muraki S. Innovating technology for society with long life expectancy. The 1st International Conference on Research in Engineering and Science Technology, 2023年10月

Yuan Yang, Yeoh WL, Luecha T, Choi J, Ping Yeap Loh, Muraki S. Effects of Impedance Control Stiffness on Assisted Elbow Flexion. 2024 IEEE International Conference on Robotics and Automation in PACIFICO Yokohama, 2024年5月

Flores HS, Yeoh WL, Loh PY, Morinaga K, Muraki S. Biomechanical Effects of Saddle Height in Cycling With Unilateral Transtibial Prostheses. 22nd Congress International Ergonomics Association, 2024年8月

Yang Y, Yeoh WL, Luecha T, Choi J, Loh PY, Muraki S. The Effects of Impedance Control Variable Stiffness on Muscle Activity During Assisted Elbow Flexion. 22nd Congress International Ergonomics Association, 2024年8月

Loh PY, Naoe M, Yeoh WL, Muraki S. Two Phases Assistive Forces on Elbow Flexion Movement Control with Power-Assisted Device. 22nd Congress International Ergonomics Association, 2024年8月

<国内発表>

能登裕子, 村木里志. 地域高齢者の運動感覚と日常生活動作モニターによる運動機能評価—第2報—. 第64回日本人間工学会, 2023年6月

田中あゆみ, 村木里志. 就労妊婦の衣服選択に関する意識調査. 第64回日本人間工学会, 2023年6月

直江将史, Yeoh WL, 村木里志, Loh PY. 肘関節屈曲動作と連動したアシスト力における筋活動の変化. 日本人間工学会九州・沖縄支部会第44回大会, 2023年12月

秋光晴, Yeoh WL, Loh PY, Muraki S. 筋活動からみた肘関節屈曲動作アシストの運動学習. 第24回計測自動制御学会/システムインテグレーション部門講演会, 2023年12月

田中あゆみ, 丸田直美, 村木里志. 妊婦における立位と椅座位の胴部寸法の違い. 一般社団法人日本家政学会 第76回大会, 2024年5月

楠本大地, Luecha T, Yeoh WL, Loh PY, 村木里志. 動作アシスト機器との協調におけるアシスト開始タイミングの検討. 第65回日本人間工学会, 2024年6月

高井伶遠, 原田咲月, Yeoh WL, 村木里志. つま先歩行における下肢の筋活動強度および動作の特徴. 第65回日本人間工学会, 2024年6月

八尋美桜, Luecha T, 原田咲月, 高井伶遠, 村木里志. 感情伝達のための肩タッチ動作の特徴. 第65回日本人間工学会, 2024年6月

原田咲月, Yeoh WL, 角紀行, 和田健希, 武本悠希, 村木里志. 靴のミッドソールの硬度が階段昇降動作に与える影響. 第65回日本人間工学会, 2024年6月

田中あゆみ, 丸田直美, 村木里志. 妊婦における姿勢の違いが胴部形状に与える影響. 第65回日本人間工学会, 2024年6月

能登裕子, 村木里志. 地域高齢者の運動感覚と運動機能・転倒リスクとの関連. 第65回日本人間工学会, 2024年6月

立石夏海, 原田咲月, 小崎智照, 村木里志. 階段降段時の脱げ防止に効果的なスリッパの重心位置の検討. 日本人間工学会九州・沖縄支部会第45回大会, 2024年11月

百田桜子, Loh PY, 村木里志. 高齢者のMR(複合現実)の受容とデバイス操作における障壁. 日本人間工学会九州・沖縄支部会第45回大会, 2024年11月

松隈浩之

【論文】

Ogino H, Matsuguma H. Effective Implementation of Feedback in Gamification: Verifying the utility of feedback to induce behavior. *International Journal of Asia Digital Art and Design*, 28 (2), 9-17; https://doi.org/10.20668/adada.28.2_9, 2024

Ikeda Y, Moriyama T, Kudo K, Matsuguma H. Development and validation of a serious game system for Endoscopic submucosal dissection training. *International Journal of Asia Digital Art and Design*, 28 (3), 33-42; https://doi.org/10.20668/adada.28.3_33, 2024

Tomimatsu S, Fujii T, Akita N, Matsuguma H, Sarantou M, Hirai Y, Kudo K. Improving the Quality of Life of Patients Living with Neurological Diseases Through Design Thinking. In: Pfannstiel, M.A., Kueh, C., Palozzi, G. (eds) *Service Design, Creativity, and Innovation in Healthcare*. Springer, Cham. https://doi.org/10.1007/978-3-031-65766-5_23, 2024

【学会発表】

<国内発表>

日向野秋穂, 平井康之, 田村良一, 松隈浩之, 張彦芳, 秋田直繁, 工藤孔梨子. 医療Xデザインプロジェクト—人工肛門(ストーマ)患者への情報デザインなど九州大病院プロジェクトの紹介. 2023年度九州大学オープンイノベーションワークショップ, 2023

池田雄一郎, 森山智彦, 工藤孔梨子, 松隈浩之. 内視鏡的粘膜下層剥離術のトレーニングを目的としたシリアスゲーム用インターフェースの開発と検証. 情報処理学会エンターテインメントコンピューティング研究会, 2023年8月

荻野宏実, 松隈浩之. 国内におけるXtoEarnのゲームサイクルのモデル化. 情報処理学会エンターテインメントコンピューティング研究会, 2023年8月

邱俊盛, 岩下恵都, 山根由佳, Luo H, 秋田直繁, 松隈浩之, 富松俊太, 平井康之, 徳久悟, 工藤孔梨子, Maruf R, 菊池君与, 佐藤洋子. バングラデシュに

おける妊産婦医療サービス改善のためのサービスデザインツールの利用 : Portable Health Clinic 妊産婦ヘルスケアサービスをケースとして. サービス学会第 12 回国内大会, 2024 年 3 月

Loh Ping Yeap

【論文】

Flores HS, Yeoh WL, Loh PY, Morinaga K, Muraki S. Biomechanical Analysis of Recreational Cycling with Unilateral Transtibial Protheses. *Prosthesis*, 5(3), 733-751; <https://doi.org/10.3390/prosthesis5030052>, 2023

Yeoh WL, Choi J, Loh PY, Fukuda O, Muraki S. Motor Characteristics of Human Adaptations to External Assistive Forces. *Journal of Robotics and Mechatronics*, 35(3), 547-555; <https://10.20965/jrm.2023.p0547>, 2023

Ando S, Loh PY. Convolutional Neural Network Approaches in Median Nerve Morphological Assessment from Ultrasound Images. *Journal of Imaging*, 10(1), 13; <https://doi.org/10.3390/jimaging10010013>, 2024

Choi J, Loh PY, Muraki S. Transient Electromyographic Responses by Isokinetic Torque Release during Mechanically Assisted Elbow Flexion. *Journal of Human Kinetics*, 90, 17-28 ; <https://doi.org/10.5114/jhk/169368>, 2024

Choi J, Maeda N, Loh PY. The effects of umbrella handle shape and grip type on muscle activation and postural variability under windy conditions. *Applied Ergonomics*, 116, 104208; <https://doi.org/10.1016/j.apergo.2023.104208>, 2024

Mariano L, Loh PY, Ishihara Y, Choi J, Muraki S. Evaluating Musculoskeletal Discomfort in Esports: A Focus on Competitive and Recreational Players From the Philippines and Japan. *Journal of Electronic Gaming and Esports*, 2(1), 1-10 ; <https://doi.org/10.1123/jege.2023-0035>, 2024

Nishimura T, Loh PY, Tomita Y, Ted K S Ng, Maeda T. Urinary pentosidine as a potential biomarker of muscle and physical performance in young adult men. *Journal of Physiological Anthropology*, 43, 29; <https://doi.org/10.1186/s40101-024-00376-1>, 2024

Phuaklikhit C, Junsri T, Seiji S, Muraki S, Loh PY. Biomechanical and physiological variables in dynamic and functional balance control during single leg loading in individuals with chronic ankle instability: a scoping review. *Sports*, 12(8), 224; <https://doi.org/10.3390/sports12080224>, 2024

Stuidiyanti L, Afiah I, Loh PY, Muraki S. The Health Benefits of Cooking Influencing the Quality of Life for the Older Generation: A Systematic Review. *Aging Medicine and Healthcare*, 10.33879/AMH.XXX.2024.04012, In press, 2024

Uno T, Matsuo T, Asano M, Loh PY. Effects of Simulated Visual Impairment Conditions on Movement and Anxiety during Gap Crossing. *Healthcare*, 12(42), 2487; <https://doi.org/10.3390/healthcare10122487>, 2024

Yang Y, Yeoh WL, Choi J, Luecha T, Loh PY, Muraki S. Effects of control parameters of wearable robotics on muscle activity during assisted elbow flexion. *International Journal of Industrial Ergonomics*, 104, 103660; <https://doi.org/10.1016/j.ergon.2024.103660>, 2024

村木里志, Choi J, Yeoh WL, Yang Y, 森永浩介, Loh PY, 福田修. 身体動作拡張テクノロジーの人間工学リサーチ・イシュー. *人間工学*, 59(4), 141-147; <https://doi.org/10.5100/jje.59.141>, 2024

Flores HS, Yeoh WL, Loh PY, Morinaga K, Muraki S. Biomechanical effects of saddle height changes in leisure cycling with unilateral transtibial protheses: A simulated study. *PLoS ONE*, 20(1), e0317121; <https://doi.org/10.1371/journal.pone.0317121>, 2025

Kumamoto R, Loh PY, He Y, Ferlinghetti E, Lancini M, Uno T. Impacts of Racket Handle Design on Table Tennis Topspin Forehand Rally Performance Among Beginner Players. *Sports*, 13(1), 22; <https://doi.org/10.3390/sports13010022>, 2025

Mariano L, Priadythama I, Loh PY, Muraki S. Effect of Gaming Controllers on Wrist Angles. *Proceedings of the 9th International Ergonomics Conference. ERGONOMICS 2022. Lecture Notes in Networks and Systems*, vol 701. Springer, Cham. https://doi.org/10.1007/978-3-031-33986-8_23, 2023

Ferlinghetti E, Abeni N, Kumamoto R, Loh PY, Lancini M. Video Skeletonization and Ai: A Novel Approach for Analyzing Kinematics in Table Tennis. *International Society of Biomechanics in Sports Proceedings Archive*, 42(1), <https://commons.nmu.edu/isbs/vol42/iss1/219>, 2024

【学会発表】

<国際発表>

Naoe M, Shimada Y, Loh PY. Influence of Seat Pan Angle and Lower Leg Stabilizer on Lower Limb Muscles Activation during Simulated Sit-Ski. *XXIX Conference of the International Society of Biomechanics (ISB)*, 2023 年 7 月

Li S, Loh PY. Effects of Finger Flexion Force on Median Nerve Compression. *XXIX Conference of the International Society of Biomechanics (ISB)*, 2023 年 7 月

Yang Y, Yeoh WL, Luecha T, Choi J, Loh PY, Muraki S. Effects of Impedance Control Stiffness on Assisted Elbow Flexion. *2024 IEEE International Conference on Robotics and Automation in PACIFICO Yokohama*, 2024 年 5 月

Ferlinghetti E, Abeni N, Kumamoto R, Loh PY, Lancini M. Video Skeletonization and Ai: A Novel Approach for Analyzing Kinematics in Table Tennis. *International Society of Biomechanics in Sports Conference 2024*, 2024 年 7 月

Uno T, Matsuo T, Asano M, Loh PY. Lower-Limb Joint Adaptation Strategies During Visually Constrained Gap Crossing. *22nd Congress International Ergonomics Association*, 2024 年 8 月

Flores HS, Yeoh WL, Loh PY, Morinaga K, Muraki S. Biomechanical Effects of Saddle Height in Cycling With Unilateral Transtibial Protheses. *22nd Congress International Ergonomics Association*, 2024 年 8 月

Yang Y, Yeoh WL, Luecha T, Choi J, Loh PY, Muraki S. The Effects of Impedance Control Variable Stiffness on Muscle Activity During Assisted Elbow Flexion. *22nd Congress International Ergonomics Association*, 2024 年 8 月

Loh PY, Naoe M, Yeoh WL, Muraki S. Two Phases Assistive Forces on Elbow Flexion Movement Control with Power-Assisted Device. *22nd Congress International Ergonomics Association*, 2024 年 8 月

<国内発表>

松尾泰平, 宇野直士, Loh PY. 視覚制限が空隙またぎ動作時の下肢動作と心理的不安特性に与える影響. 第 64 回日本人間工学会, 2023 年 9 月

直江将史, Yeoh WL, 村木里志, Loh PY. 肘関節屈曲動作と連動したアシスト力における筋活動の変化. 日本人間工学会九州・沖縄支部会第 44 回大会, 2023 年 12 月

秋光晴, Yeoh WL, Loh PY, Muraki S. 筋活動からみた肘関節屈曲動作アシストの運動学習. 第 24 回計測自動制御学会/システムインテグレーション部門講演会, 2023 年 12 月

楠本大地, Luecha T, Yeoh WL, Loh PY, 村木里志. 動作アシスト機器との協調におけるアシスト開始タイミングの検討. 第 65 回日本人間工学会, 2024 年 6 月

前田夏輝, Loh PY. 掃除中におけるスクイジーハンドルデザインが手掌や上腕の負担に与える影響. 第 65 回日本人間工学会, 2024 年 6 月

熊本龍志, 宇野直士, Loh PY. グリップによる卓球初心者のフォアハンド打球への影響. 第 65 回日本人間工学会, 2024 年 6 月

濱上聖也, 西村貴孝, Loh PY. e スポーツゲーム中級者の上半身における筋持久力がゲームプレイに与える影響. 日本生理人類学会第 85 回大会, 2024 年 6 月

百田桜子, Loh PY, 村木 里志. 高齢者の MR (複合現実) の受容とデバイス操作における障壁. 日本人間工学会九州・沖縄支部会第 45 回大会, 2024 年 11 月

嶋田悠二, Loh PY. バラアスリートの動作再現を目的としたシットスキーの構造設計に関する研究. 日本人間工学会九州・沖縄支部会第 45 回大会, 2024 年 11 月

【その他】

<受賞>

Best Reviewer Award 2023. Journal of Physiological Anthropology. 2024 年

<メディア掲載>

中国新聞, 広島駅北口の金の銅像、距離取れず「鑑賞しづらい」正面に切符売り場、なぜここに? <https://www.chugoku-np.co.jp/articles/-/356429>, 2023 年 11 月 23 日

大草孝介

【論文】

Ishibashi F, Okusa K, Tokai Y, Hirasawa T, Kawakami T, Mochida K, Yanai Y, Yokoi C, Hayashi Y, Ozawa S, Uraushihara K, Minato Y, Nakanishi H, Ueyama H, Kataoka M, Toyama Y, Mizokami Y, & Suzuki S. A mathematical simulation model to determine the optimal endoscopic screening strategy for detection of H. pylori-naïve gastric neoplasms. *Gastric Cancer*, 27, 1078–1087. <https://doi.org/10.1007/s10120-024-01525-2>, 2024.

Ota T, & Okusa K. Model-based estimation of heart movements using microwave Doppler radar sensor. *Journal of Physiological Anthropology*, 43, Article 27. <https://doi.org/10.1186/s40101-024-00373-4>, 2024.

Nagai M, Ishibashi F, Okusa K, Mochida K, Ozaki E, Morishita T, & Suzuki S. Optimal visual gaze pattern of endoscopists for improving adenoma detection during colonoscopy (with video). *Gastrointestinal endoscopy*, 101(3), 639–646.e3. <https://doi.org/10.1016/j.gie.2024.09.028>, 2025

【学会発表】

<国際発表>

Tanaka R, Okusa K. Model-Based Radar Signal Anomaly Detection Using Autoencoder with Application to Gait Analysis. The 12th conference of the Asian Regional Section of the International Association for Statistical Computing (IASC-ARS), 2023 年 12 月

Ota T, Okusa K. Statistical estimation of heart movements by microwave Doppler radar sensor. The 25th International Conference on Computational Statistics (COMPSTAT2023), 2023 年 8 月

<国内発表>

片山健悟, 大草孝介. 転移学習を用いた楽器編成の自動認識. 日本計算機統計学会第 37 回大会, 2023 年 6 月

相川優哉, 大草孝介. 競走馬の画像データによる各個体が持つ特性の抽出. 日本計算機統計学会第 37 回大会, 2023 年 6 月

田中瑠偉, 大草孝介. オートエンコーダを用いたモデルベースのレーダー信号異常検出と歩行分析への応用. 日本計算機統計学会第 37 回シンポジウム, 2023 年 11 月

太田隆, 大草孝介. マイクロ波ドップラセンサを用いた心動作のモデリングによる心周期の推定. 日本計算機統計学会第 37 回シンポジウム, 2023 年 11 月

春日井海, 牧草夏実, 大草孝介, 庄司裕子. 骨格座標データを用いた姿勢からの感情予測の試. 第 19 回日本感性工学会春季大会, 2024 年 3 月

石曾根毅, 樋口知之, 大草孝介, 中村和幸. 注意機構を用いた準周期信号のオンライン周期推定と異常値同定の同時実現. Prof. Toshinari Kamakura's Retirement Commemoration Symposium, 2024 年 3 月

太田隆・大草孝介. ドップラセンサを用いた心動作のモデリングによる RR 間隔の推定. 日本生理人類学会第 85 回大会, 2024 年 5 月

土谷睦月・渡邊葵・太田隆・大草孝介. マイクロ波レーダーを用いた心動作モデリングによる非接触ストレス推定法の開発. 2024 年度日本生理人類学会フロンティアミーティング (秋期), 2024 年 11 月.

蛭名こころ・石橋史明・大草孝介. 大腸内視鏡検査時の視線移動パターンと ADR の関係に関する研究. 2024 年度日本生理人類学会フロンティアミーティング (秋期), 2024 年 11 月.

【その他】

<産業財産権>

石橋史明, 大草孝介. 解析装置、解析方法及びコンピュータープログラム. 産業財産権番号 2024-075929, 2024

能登裕子

【論文】

Kajiwara K, Harada K, Shiraki J, Ono T, Nagata T, Morioka A, Ide A, Yoshimura M, Ogata A, Noto H, Kako J. Assessing Caregiver Burden, Tasks, and Heart Rate Using Wearable Sensors: A Longitudinal Study of Informal Caregivers of Persons With Dementia and Older Adults. *Cureus* 17(1): e78059; doi:10.7759/cureus.78059, 2025

能登裕子. 気軽に実験しませんか PartIV～圧力測定シートと EMG を用いた測定と分析例. 看護人間工学会誌, 5, 18-19;

<https://cir.nii.ac.jp/crid/1010302693919564416>, 2024

【学会発表】

<国内発表>

能登裕子. 気軽に実験しませんか PartIV～圧力測定シートと EMG を用いた測定と分析例. 第 5 回看護人間工学会学術集会, 2023 年 9 月

能登裕子, 村木里志. 地域高齢者の運動感覚と日常生活動作モニターによる運動機能評価—第 2 報—. 第 64 回日本人間工学会, 2023 年 6 月

能登裕子, 村木里志. 地域高齢者の運動感覚と運動機能・転倒リスクとの関連. 第 65 回日本人間工学会, 2024 年 6 月

樋口重和

【著書】

樋口重和. ヒト概日リズムの測定法 (pp110-111), 概日リズムの同調機構・光同調 (pp 116-117), 睡眠禁止帯 (pp126) 睡眠学の百科事典 (日本睡眠学会編) 丸善出版, 2024.06

【論文】

Nishimura Y, Ohashi M, Eto T, Hayashi S, Motomura Y, Higuchi S, Takahashi M. Association of self-monitoring performance of cognitive performance with personal diurnal preference when sleep-deprived. *Chronobiol Int*, 42 (1), 122 - 132, 2025. (DOI: 10.1080/07420528.2024.2449014)

Higuchi S. Light at night and circadian rhythms: from the perspective of physiological anthropology research. *J Physiol Anthropol*, 43(1), 32, 2024 (DOI: 10.1186/s40101-024-00380-5)

江藤太亮, 樋口重和, 北村真吾. ヒトの非視覚的機能を考慮した光の国際基準 (melanopic EDI) とこれに基づく屋内光環境の推奨事項. 日本生理人類学会誌, 29, 27-38, 2024 (DOI: https://doi.org/10.20718/jjpa.29.0_27)

Shin N, Ikeda Y, Motomura Y, Higuchi S. Effects of observing own/others hand movement in different perspectives on mu rhythm suppression: an EEG study. *J Physiol Anthropol*, 4;43(1):21, 2024 (DOI: <https://doi.org/10.1186/s40101-024-00369-0>)

Tsurudome Y, Yoshida Y, Hamamura K, Ogino T, Yasukochi S, Yasuo S, Iwamoto A, Yoshihara T, Inazumi T, Tsuchiya S, et al. Prostaglandin F2 α Affects the Cycle of Clock Gene Expression and Mouse Behavior. *Int J Mol Sci*, 25(3):1841, 2024 (DOI: <https://doi.org/10.3390/ijms25031841>)

- Spitschan M, Kervezee L, Lok R, McGlashan E, Najjar RP; ENLIGHT Consortium. ENLIGHT: A consensus checklist for reporting laboratory-based studies on the non-visual effects of light in humans. *EbioMedicine*, 98:104889, 2023 (DOI: <https://doi.org/10.1016/j.ebiom.2023.104889>)
- Ohashi M, Eto T, Takasu T, Motomura Y, Higuchi S. Relationship between Circadian Phase Delay without Morning Light and Phase Advance by Bright Light Exposure the Following Morning. *Clocks Sleep*, 5(4):615-626, 2023 (DOI: <https://doi.org/10.3390/clockssleep5040041>)
- Eto T, Kitamura S, Shikano A, Tanabe K, Higuchi S, Noi S. Estimating dim light melatonin onset time in children using delta changes in melatonin. *Sleep Biol Rhythms*, 22(1):239-246, 2024 (DOI: <https://doi.org/10.1007/s41105-023-00493-x>)
- Maeda T, Koga H, Nonaka T, Higuchi S. Effects of bathing-induced changes in body temperature on sleep. *J Physiol Anthropol*, 42(1):20, 2023 (DOI: <https://doi.org/10.1186/s40101-023-00337-0>)
- Motomura Y, Hayashi S, Kurose R, Yoshida H, Okada T, Higuchi S. Effects of others' gaze and facial expression on an observer's microsaccades and their association with ADHD tendencies. *J Physiol Anthropol*, 42(1):19, 2023 (DOI: <https://doi.org/10.1186/s40101-023-00335-2>)
- Nishimura T, Motoi M, Toyoshima H, Kishida F, Shin S, Katsumura T, Nakayama K, Oota H, Higuchi S, Watanuki S, Maeda T. Endocrine, inflammatory and immune responses and individual differences in acute hypobaric hypoxia in lowlanders. *Sci Rep*, 4:13(1):12659, 2023 (DOI: <https://doi.org/10.1038/s41598-023-39894-w>)
- Eto T, Higuchi S. Review on age-related differences in non-visual effects of light: melatonin suppression, circadian phase shift and pupillary light reflex in children to older adults. *J Physiol Anthropol*, 24:42(1):11, 2023 (DOI: <https://doi.org/10.1186/s40101-023-00328-1>)
- 【学会発表】**
<国際発表>
Higuchi S, Sato A, Ohashi M, Eto T, Nishimura T, Yasukochi Y, Nakayama K, Oota H. "Association of MTNR1B Polymorphisms with Glucose Tolerance After One Night of Simulated Night Shift". The 27th Conference of the European Sleep Research Society, Spain, 2024.9
- Higuchi S, Eto T, Kitamura S. "Individual differences in sleep and circadian rhythm in children in relation to melatonin suppression by light at night". The Society for the Study of Human Biology 2024 Conference, Portugal, 2024.9
- Higuchi S. Individual Differences in Effects of Light at Night and Circadian Rhythms. Sapporo Symposium on Biological Rhythm 2024, 北海道, 2024.8 (招待講演)
- Nakazawa Y, Imaizumi K, Xu N, Tokunaga K, Ohashi M, Eto T, Hayakawa T, Higuchi S. Study on the Ethnic Difference in Dose-dependent Response to Light-induced Melatonin Suppression. 7th Asian Forum on Chronobiology in Sapporo, 北海道, 2024.8
- Imaizumi K, Nakazawa Y, Xu N, Eto T, Tsujimura S, Higuchi S. Contribution of melanopsin retinal ganglion cells to pupillary light responses to different illuminance and color temperature lighting. 7th Asian Forum on Chronobiology in Sapporo, 北海道, 2024.8
- Higuchi S. Dose-response relationship of light-induced melatonin suppression in East Asians. Society for Light Treatment and Biological Rhythms 35th Annual Meeting, Czech Republic, 2024.6
- Higuchi S. Circadian rhythms and artificial light at night: From Laboratory to Field. The Seminar Series "Current Topics in Sleep & Circadian Health" 【Non-image-forming effects of light (Spring 2024)】, Web開催, 2024.5 (招待講演)
- Shin N, Unno N, Uemura Y, Motomura Y, Higuchi S. The Mirror System Activity During the Observation of Dependency-Related Behavior: A Study on Smartphone Addiction. 16th International Congress of Physiological Anthropology, Malaysia, 2023.9
- <国内発表>
樋口重和.メラノプシンの光反応性の民族差について:メタマー光を用いた研究.日本生理人類学会「光と生体リズム研究部会」日本時間生物学会合同セミナー,京都,2025.3(招待講演)
- 樋口重和.光の視覚及び非視覚的作用について:子どもと大人の比較.VSAT第11回オープンイベント,京都,2025.3(招待講演)
- 荒木維子,徳永恭平,松尾浩一,小田祐司,金丸国夫,清家孝和,宮内文久,樋口重和.二交代制勤務に従事する看護師の概日リズム位相についての研究.2024年度日本生理人類学会フロンティアミーティング,東京,2024.11
- 今泉一輝,中澤勇介,許諾,江藤太亮,辻村誠一,樋口重和.メラノプシン網膜神経節細胞の反応性の民族差に関する研究-定常瞳孔反応を用いた検討-.2024年度日本生理人類学会フロンティアミーティング,東京,2024.11
- 申饒敬,池田悠稀,元村祐貴,樋口重和.自己と他者の区別を捉える脳活動指標についての検討.2024年度日本生理人類学会フロンティアミーティング,東京,2024.11
- 徳永恭平,荒木維子,松尾浩一,小田祐司,金丸国夫,宮内文久,清家孝和,樋口重和.二交代制勤務に従事する看護師の概日リズム位相についての研究.第31回日本時間生物学会学術大会,富山,2024.11
- 中澤勇介,今泉一輝,許諾,江藤太亮,早川敏之,樋口重和.メラトニン抑制と定常瞳孔反応からみた光の非視覚的作用の民族差に関する研究.第31回日本時間生物学会学術大会,富山,2024.11
- 樋口重和.概日リズムからみた光環境への影響.第78回日本人類学会大会,大阪,2024.10(招待講演)
- 樋口重和.光環境による睡眠への影響.第33回日本睡眠学会学術大会,沖縄,2024.9(招待講演)
- 荒木維子,徳永恭平,松尾浩一,小田祐司,金丸国夫,宮内文久,樋口重和.二交代制勤務に従事する看護師の概日リズム位相と光曝露についての研究.日本睡眠学会第48回定期学術集会,神奈川,2024.7
- 許諾,張亦馳,樋口重和. The Impact of High Correlated Color Temperature Light on Sleep Patterns:A Gender and living condition-Based Investigation. 日本睡眠学会第48回定期学術集会,神奈川,2024.7
- 樋口重和.眠気に伴う事故・パフォーマンス低下の防止に向けた最新の知見.日本睡眠学会第48回定期学術集会,神奈川,2024.7(招待講演)
- 吉岡潤哉,申饒敬,太田英伸,宮寺伸明,樋口重和.D(デジタル)セラピーコンテンツ観察時の脳活動に関する研究.日本生理人類学会第85回大会,東京,2024.6
- 中澤勇介,今泉一輝,許諾,徳永恭平,大橋路弘,江藤太亮,早川敏之,樋口重和.用量依存的反応から見た光によるメラトニン抑制の民族差に関する研究.日本生理人類学会第85回大会,東京,2024.6
- 今泉一輝,中澤勇介,許諾,江藤太亮,辻村誠一,樋口重和.メラノプシン網膜神経節細胞への刺激量の違いが定常瞳孔反応に与える影響-異なる照度・色温度の照明光を用いた検討-.日本生理人類学会第85回大会,東京,2024.6
- 濱もも,今泉一輝,樋口重和,元村祐貴.成人の注意欠如多動性障害傾向と光感受性の関連調査.日本生理人類学会第85回大会,東京,2024.6
- 平沢洗,澤井賢一,松前あかね,藤智亮,樋口重和.視聴覚刺激の低減とデザイン経験の違いが創造性に与える影響.日本生理人類学会第85回大会,東京,2024.6
- 太田英伸,樋口重和,高橋恵一,申饒敬,宮寺伸明.ASDリスクを持つ幼児に「デジタルおもちゃ」にて早期療育を試みた一例.日本生理人類学会第85回大会,東京,2024.6
- 池田悠稀,申ナー敬,徳永健太郎,工藤真生,跡見友章,樋口重和.ピクトグラム観察時の脳活動に関する研究:事象関連脱同期を用いた検討.第42回日本生理心理学会大会,神奈川,2024.5
- 上村結芽子,申饒敬,吉岡潤哉,元村祐貴,樋口重和.表情の認知過程における呼吸の影響の検討.第19回日本感性工学会春季大会,福岡,2024.3
- 樋口重和.夜勤時の光環境と生体リズム.日本生理人類学会・日本時間生物学会ジョイントセミナー,京都,2024.3(招待講演)
- 上村結芽子,申饒敬,吉岡潤哉,元村祐貴,樋口重和.呼吸の変化が恐怖表情の認知活動に与える影響.2023年度日本生理人類学会フロンティアミーティング,東京,2023.11

高巢とあ希, 大橋路弘, 元村祐貴, 西村貴孝, 樋口重和. 朝の光の有無によるメラトニン受容体遺伝子近傍の遺伝子多型と概日リズムの位相変位の関連. 2023年度日本生理人類学会フロンティアミーティング, 東京, 2023.11

申覺敬, 海野真乙, 上村結芽子, 元村祐貴, 樋口重和. スマートフォン依存者における依存行為観察時の脳活動. 2023年度日本生理人類学会フロンティアミーティング, 東京, 2023.11

樋口重和. 医療現場に必要な睡眠情報の適切な理解と活用. 第14回日本臨床睡眠医学会学術大会, 大阪, 2023.10 (招待講演)

江藤太亮, 樋口重和. 子どもの概日リズム・睡眠習慣に対する光環境の影響. 日本睡眠学会第45回定期学術集会・第30回日本時間生物学会学術大会合同大会, 神奈川, 2023.9 (招待講演)

樋口重和. ヒトのメラトニン受容体の遺伝子多型に関する研究. 日本睡眠学会第45回定期学術集会・第30回日本時間生物学会学術大会合同大会, 神奈川, 2023.9 (招待講演)

樋口重和. 光のスペクトラムと睡眠・概日リズム. 日本睡眠学会第45回定期学術集会・第30回日本時間生物学会学術大会合同大会, 神奈川, 2023.9 (招待講演)

田邊弘祐, 鹿野晶子, 江藤太亮, 樋口重和, 野井真吾. 午前中に行う30分間の光暴露・運動・光暴露+運動がメラトニン分泌開始時刻(DLMO)および夜間睡眠に及ぼす影響. 日本睡眠学会第45回定期学術集会・第30回日本時間生物学会学術大会合同大会, 神奈川, 2023.9

大橋路弘, 江藤太亮, 高巢とあ希, 元村祐貴, 樋口重和. 朝の光によるヒト概日リズムの位相リセットの個人差について—恒常性の観点から—. 日本睡眠学会第45回定期学術集会・第30回日本時間生物学会学術大会合同大会, 神奈川, 2023.9

高巢とあ希, 大橋路弘, 元村祐貴, 西村貴孝, 樋口重和. メラトニン受容体遺伝子近傍の遺伝子多型と概日リズムの位相変位の関連. 日本睡眠学会第45回定期学術集会・第30回日本時間生物学会学術大会合同大会, 神奈川, 2023.9

樋口重和. 夜勤時の光環境と体内時計. 日本看護研究学会第49回学術集会, Web開催, 2023.8 (招待講演)

前田享史, 古賀弘子, 野中隆, 樋口重和. 入浴による体温変化が睡眠に及ぼす影響. 日本生理人類学会第84回大会, 福岡, 2023.6

今泉一輝, 大橋路弘, 辻村誠一, 樋口重和. メラノプシン網膜神経節細胞への刺激量のみが異なる同一の色温度照明が定常瞳孔反応に及ぼす影響—silent substitution法を用いて—. 日本生理人類学会第84回大会, 福岡, 2023.6

申覺敬, 海野真乙, 上村結芽子, 元村祐貴, 樋口重和. 依存行為観察時のミラーシステム活動—スマートフォン依存に着目した研究—. 第41回日本生理心理学会大会, 東京, 2023.5

今泉一輝, 大橋路弘, 辻村誠一, 樋口重和. 網膜メラノプシン細胞の瞳孔の対光反応への寄与に関する研究. 第10回九州山口沖繩リズム研究会, 福岡, 2023.4

【その他】

<受賞>

2024年度日本生理人類学会フロンティアミーティング優秀ポスター賞. 今泉一輝. メラノプシン網膜神経節細胞の反応性の民族差に関する研究—定常瞳孔反応を用いた検討—. 2024.11

第31回日本時間生物学会学術大会優秀演題賞. 徳永恭平. 二交代制勤務に従事する看護師の概日リズム位相についての研究. 2024.11

2023年度日本生理人類学会フロンティアミーティング優秀ポスター賞. 上村結芽子. 呼吸の変化が恐怖表情の認知活動に与える影響. 2023.11

2023年度日本生理人類学会フロンティアミーティング優秀ポスター賞. 申覺敬. スマートフォン依存者における依存行為観察時の脳活動. 2023.11

日本睡眠学会第45回定期学術集会・第30回日本時間生物学会学術大会合同大会優秀演題賞. 大橋路弘. 朝の光によるヒト概日リズムの位相リセットの個人差について—恒常性の観点から—. 2023.9

日本生理人類学会第84回大会優秀発表賞. 今泉一輝. メラノプシン網膜神経節細胞への刺激量のみが異なる同一の色温度照明が定常瞳孔反応に及ぼす影響—silent substitution法を用いて—. 2023.6

平松千尋

【著書】

平松千尋. 広鼻猿類(pp. 58-59). 霊長類学の百科事典(日本霊長類学会編), 丸善出版, 2023

【論文】

Takahashi N, Sawayama M, Chen X, Motomura Y, Takeichi H, Miyauchi S, Hiramatsu C. Temporal and spatial analysis of event-related potentials in response to color saliency differences among various color vision types. *Frontiers in Human Neuroscience*, 18: 1-17 2024. (doi: 10.3389/fnhum.2024.14413)

Hiramatsu C, Takashima T, Sakaguchi H, Chen X, Tajima S, Seno T, Kawamura S. Influence of colour vision on attention to, and impression of, complex aesthetic images. *Proceedings of the Royal Society B: Biological Sciences* 290(2006): 20231332, 2023. (doi: 10.1098/rspb.2023.1332)

【学会発表】

<国際発表>

Ishii M, Motomura Y, Takeichi H, Shigeto H, Hagiwara K, Maruyama O, Hiramatsu C. Exploring the neural representation of hypnagogic imagery using magnetoencephalography: A preliminary study. The 27th annual meeting of the Association for the Scientific Study of Consciousness, Japan, Jul 2024

Sow MK, Saksirikosol C, Shamohammadi M, Rattanakasamsuk K, Phuangsuwan C, Hiramatsu C. Worldwide survey of the association between color and temperature. The 15th Congress of the International Colour Association (AIC) 2023, Thailand, Nov 2023

Hiramatsu C, Yamada A, Ishii M, Baba Y. Qualia change phenomenon related to color vision diversity. The 15th Congress of the International Colour Association (AIC) 2023, Thailand, Nov 2023

Hiramatsu C. Visual recognition in capuchin monkeys. *Ecology, Biology, Health and Behavior of White-Faced Capuchins: Celebrating and Promoting Longitudinal Research and Conservation*, Costa Rica, Nov 2023

<国内発表>

平松千尋. 色覚多様性をめぐるイントロダクション. 日本色彩学会第55回全国大会「パネルディスカッション・色覚多様性をPoblogue」, 2024年6月

Sow MK, Saksirikosol C, Shamohammadi M, Rattanakasamsuk K, Phuangsuwan C, Hiramatsu C. Color and temperature association: developmental and cross-cultural studies. 日本色彩学会第55回全国大会, 2024年6月

澤井賢一

【論文】

Iwami T, Sawai K, Omoto A. Direction-of-Arrival Estimation in Half-Space from Single Sample Array Snapshot. *The Journal of the Acoustical Society of America*, 153(5), 3025—3035, 2023. (doi: 10.1121/10.0019550)

Maruyama O, Yoshinaga A, Sawai K. Preservation of Emotional Context in Tweet Embeddings on Social Networking Sites. *Artificial Life and Robotics*, 29, 486—493, 2024. (doi: 10.1007/s10015-024-00974-3)

【学会発表】

<国際発表>

Matsumae A, Shichijo K, Shoji K, and Sawai K. Characteristics of interpersonal phonetic communication in resonance during co-creation. 24th International Conference on Engineering Design, France, July 2023

Sasak S, Nishida H, Sawai K, and Ushiyama T. Lyric-Based Image Generation for Individual Songs with Text2Image Model. 2024 18th International Conference on Ubiquitous Information Management and Communication, Malaysia, Jan 2024

Shigetomi R, Nishida H, Sawai K, and Ushiyama T. Integrating Repeat Listening Patterns for Enhanced Music Recommendation. 2024 18th International Conference on Ubiquitous Information Management and Communication, Malaysia, Jan 2024

Maruyama O, Yoshinaga A, and Sawai K. How much emotional information the distributed representations of tweets in SNS preserve. 29th International Symposium on Artificial Life and Robotics, Japan, Jan 2024

<国内発表>

松浦健太, 澤井賢一. 人間乱数を使った個人認証についての指標の有効性と頑健性. 電子情報通信学会バイオメトリクス研究会, 2023年10月

西田絢子, 澤井賢一. サブスク時代における音楽体験の実態調査—未知の楽曲へのアクセスと推薦機能の関係. 第35回日本ポピュラー音楽学会年次大会, 2023年12月

佐々木翔一, 西田絢子, 澤井賢一, 工藤真生, 牛尼剛聡. 歌詞と音響特徴の分析に基づく Text2Image モデルを用いた楽曲サムネイル画像の自動生成. 第16回データ工学と情報マネジメントに関するフォーラム, 2024年2月

重富竜ノ介, 西田絢子, 澤井賢一, 牛尼剛聡. 繰り返し聴取による興味の変化を考慮した楽曲推薦. 第16回データ工学と情報マネジメントに関するフォーラム, 2024年2月

平沢洗, 澤井賢一, 松前あかね, 藤智亮, 樋口重和. 視聴覚刺激の低減とデザイン経験の違いが創造性に与える影響. 日本生理人類学会第85回大会, 2024年6月

大田星, 松浦健太, 澤井賢一, 西田絢子. 1968年から1997年の日本のポピュラー音楽における複雑なコードの変遷. 日本音楽学会西日本支部第60回例会, 2024年7月

吉尾天良, 澤井賢一. エージェントの持つ戦略のランダム性の強さがボーカーの楽しさに及ぼす影響の検討. 情報処理学会第53回ゲーム情報学研究会, 2024年9月

大田星, 松浦健太, 澤井賢一, 西田絢子. 日本のポピュラー音楽における複雑なコードとその使用法. 日本音楽学会第75回全国大会, 2024年11月

松浦健太, 澤井賢一. 周辺視野を含めた視野における運動視差による奥行き知覚の計算論的理解のためのモデルの構築. 日本視覚学会 2025年冬季大会, 2025年1月

澤井賢一. 比較刺激の繰り返しを伴わない恒常法の提案と性能評価. 日本視覚学会 2025年冬季大会, 2025年1月

西田絢子, 牛尼剛聡, 澤井賢一, 工藤真生. 音楽サブスク時代における音楽体験の実態とデザイン. 第142回音楽情報科学研究会, 2025年3月

大田星, 松浦健太, 澤井賢一, 西田絢子. 日本のポピュラー音楽のコード進行の変遷を分析する方法の検討. 第142回音楽情報科学研究会, 2025年3月

【その他】

<受賞>

2023年 BioX 研究会奨励賞, 松浦健太, 澤井賢一. 人間乱数を使った個人認証についての指標の有効性と頑健性. 2023年11月

元村祐貴

【著書】

元村祐貴. 第II部 6章睡眠時間と眠気, 睡眠負債, 睡眠学の百科事典 丸善出版, 編:日本睡眠学会 2024

【論文】

Yuki Nishimura, Michihiro Ohashi, Taisuke Eto, Sayuri Hayashi, Yuki Motomura, Shigekazu Higuchi, Masaya Takahashi. Association of self-monitoring performance of cognitive performance with personal diurnal preference when sleep-deprived. Chronobiology International 42(1) 1-11, 2025

Kristina Denisova, Yuki Motomura, Chen Song. Sleep on it: exploring the psychology of sleep amidst contemporary challenges. Scientific reports 14(1) 30501-30501 2024

Nakyeong Shin, Yuki Ikeda, Yuki Motomura, Shigekazu Higuchi. Effects of observing own/others hand movement in different perspectives on mu rhythm suppression: an EEG study. Journal of physiological anthropology 43(1) 21-21, 2024

Naoko Takahashi, Masataka Sawayama, Xu Chen, Yuki Motomura, Hiroshige Takeichi, Satoru Miyauchi, Chihiro Hiramatsu. Temporal and spatial analysis of event-related potentials in response to color saliency differences among various color vision types. Frontiers in human neuroscience 18 1441380-1441380, 2024

Ohashi, Michihiro, Taisuke Eto, Toaki Takasu, Yuki Motomura, Shigekazu Higuchi. Relationship between Circadian Phase Delay without Morning Light and Phase Advance by Bright Light Exposure the Following Morning. Clocks & Sleep 5(4) 615-626, 2024

Yuki Motomura, Sayuri Hayashi, Ryousei Kurose, Hiroki Yoshida, Takashi Okada, Shigekazu Higuchi. Effects of others' gaze and facial expression on an observer's microsaccades and their association with ADHD tendencies. Journal of Physiological Anthropology 42(1), 2023

Yuki Motomura, Ayaka Fukuzaki, Sanami Eto, Naoki Hirabayashi, Motoharu Gondo, Satoshi Izuno, Osamu Togao, Koji Yamashita, Kazufumi Kikuchi, Nobuyuki Sudo, and KazufumiYoshihara. Alexithymia characteristics are associated with salience network activity in healthy participants: an arterial spin labeling study. Journal of Physiological Anthropology 42(1) 18-18, 2023

元村 祐貴.睡眠不足時の脳機能, 生理心理学と精神生理学 41 巻 1 号 6-6, 2023

【学会発表】

<国際発表>

Yuki Motomura, Shingo Kitamura, Kentaro Oba, Ruri Katsunuma, Yuri Terasawa, Akiko Hida, Yoshiya Moriguchi, Kazuo Mishima, Functional connectivity commonly related to both the karolinska sleepiness scale and the psychomotor vigilance test during resting-state, ESR2023, Spain, 2023

Kazuma Saito, Yuki Motomura, A Study on Estimating Modalities of Attention Using Machine Learning, ICPA2023, Malaysia, 2023/9/7-8

Tamaki Ueda, Takayuki Momoi, Masako Ozeki, Shigekazu Higuchi, Yuki Motomura, Exploring the Correlation Between Attention-Deficit/Hyperactivity Disorder (ADHD) Traits and EEG Activity During Tasks in Sleep Deprived States, ICPA2023, Malaysia, 2023/9/7-8

<国内発表>

元村祐貴.睡眠不足時の脳機能 シンポジウム 1: 臨床生理心理学の展開. 第41回日本生理心理学会大会, 2023年

上田珠生, 桃井啓門, 尾関雅子, 樋口重和, 元村祐貴.注意欠如・多動性障害の特性と睡眠中の課題時脳波との関係. 2023年度日本生理人類学会フロンティアミーティング, 東京, 2023/11/18

斎藤和磨, 元村祐貴.機械学習を用いた注意のモダリティの推定に関する研究. 2023年度日本生理人類学会フロンティアミーティング, 東京, 2023/11/18

長棟陸, 元村祐貴. 自律神経系の変化が心拍誘発電位に与える影響. 2023 年度日本生理人類学会フロンティアミーティング, 東京, 2023/11/18

濱もも, 今泉一輝, 樋口重和, 元村祐貴. 成人の注意欠如多動性障害傾向と光感受性の関連調査. 日本生理人類学会第 85 回大会, 東京, 2024/6/14-16

柳井悠人, 堤崇志, 吉松拓也, 茨木拓也, 元村祐貴. イヤホン型耳内脳波計を用いた入眠検知アルゴリズムの構築に関する予備的研究. 日本生理人類学会第 85 回大会, 東京, 2024/6/14-16

元村祐貴: 内受容感覚と情動: 心拍誘発電位と自律神経系指標測定によるアプローチ シンポジウムII 内受容から考える身体と脳. 日本生理人類学会大 85 回大会, 2024 年

柳井悠人, 堤崇志, 吉松拓也, 横田悠右, 茨木拓也, 元村祐貴. イヤホン型耳内脳波計を用いた入眠検知に関する研究. 2024 年度日本生理人類学会フロンティアミーティング (秋期)

橋彌和秀

【論文】

橋彌和秀. 「教え・育む」と「教わり・育つ」の対立と均衡点: ヒトの適応戦略としての教育とその心的基盤. 教育哲学研究, 129, 7-13, 2024 年 5 月

Nitta H, Uto Y, Chaya K, Hashiya K. Self-face processing in relation to self-referential tasks in 24-month-old infants: A study through eye movements and pupillometry measures. *Consciousness and Cognition* Volume 127. (<https://doi.org/10.1016/j.concog.2024.103803>)

Kishimoto, R. Hashiya K. Recency and rarity effects in disambiguating the focus of utterance: A developmental study. *PLOS ONE*, 20(2), e0317433. (doi: 10.1371/journal.pone.0317433)

【学会発表】

<国際発表>

Hashiya, K., Evolutionary and Developmental Origins of Teaching and Learning in Humans. International Forum on Child and Adolescent Development. Shandong Normal University, Jinan, China. Nov. 24. (招待講演)

Hashiya, K., & Kojima, F., Development of Distribution Behavior: 5 to 8 Year Olds Do Not Consider the Recipient's Consumption History, While Adults Do. BCCCD24 Budapest CEU Conference on Cognitive Development, Budapest. 2024, Jan. 4-6.

<国内発表>

橋彌和秀. 「教え・育む」と「教わり・育つ」の対立と均衡点—ヒトの適応戦略としての教育とその心的基盤—研究討議「ヒトから教育を問う」, 教育哲学学会第 66 回大会, 九州大学伊都キャンパス, 2023 年 10 月 7 日 (招待講演)

橋彌和秀, 小島風夏. 分配行動における方略の発達の变化: 被分配者の消費履歴を 5-8 歳児は考慮しない (しかし成人は考慮する), 日本人間行動進化学会第 16 回大会, 大阪公立大学杉本キャンパス, 2023 年 12 月 2 日~2023 年 12 月 3 日

岸本励季, 橋彌和秀. 成人と 7-10 歳児における曖昧発話の解釈: 近接性と希少性の統合方略の違い, 日本人間行動進化学会第 16 回大会, 大阪公立大学杉本キャンパス, 2023 年 12 月 2 日~2023 年 12 月 3 日

Hattori, K., Miyauchi, S., & Hashiya, K., Strategies to encode non-speech sounds into language: A developmental study., IEICE Technical Committee Submission System., 沖縄産業支援センター (那覇市), 2024 年 5 月 13~14 日

橋彌和秀. せんせいは赤ちゃん~乳幼児のこころとコミュニケーションの発達~, 福岡市保育協会 保育研修会講演, 福岡市市民福祉プラザ, 2024 年 7 月 9 日 (招待講演)

服部楓, 宮内翔子, 橋彌和秀. 慣習的なオノマトペ語彙表現がない非言語音を言語化する方略とその発達の变化, 日本心理学会第 88 回大会, 熊本城ホール, 2024 年 9 月 6 日

橋彌和秀. 内なる目」と「外なる目」との接続可能性—ヒトの目の外部形態の進化を巡る議論と展望, 第 29 回日本顔学会大会特別講演, アイーナいわて県民交流センター, 2024 年 11 月 2 日 (招待講演)

服部楓, 宮内翔子, 橋彌和秀. 非言語音に対する音声言語表現の収斂過程, 日本行動進化学会第 17 回大会, 広島修道大学, 2024 年 12 月 7 日~2024 年 12 月 8 日

岸本励季, 橋彌和秀. 情報伝達における情報の抽出と圧縮方略: 伝達相手の年齢による影響, 日本人間行動進化学会第 17 回大会, 広島修道大学, 2024 年 12 月 7 日~2024 年 12 月 8 日

橋彌和秀. 赤ちゃん・子ども研究への招待: コミュニケーションとこころの発達へのアプローチ, 西南学院大学, 2025 年 1 月 16 日 (招待講演)

橋彌和秀. マルチモーダルな経験としての子育て/子育て/コミュニケーション, 日本赤ちゃん学会保育実践科学部会早春セッション@糸島「デジタルで代替できるもの・できないもの」, 伊都文化会館. 2 月 15 日 (招待講演)

橋彌和秀. 「愛着/アタッチメント」概念の歴史性—近代の養育規範に照らしてみる愛着/アタッチメント理論—, 会員企画ラウンドテーブル指定討論, 日本発達心理学会第 36 回大会, 明星大学, 3 月 4~6 日.

橋彌和秀. 発達カスケードの探究—乳幼児期のロコモーション発達を手がかりに—, 会員企画自主シンポジウム指定討論, 日本発達心理学会第 36 回大会, 明星大学, 3 月 4~6 日.

橋彌和秀. 事象の因果に迫る, 人社系協働研究・教育コモンズ第 32 弾企画シンポジウム指定討論, 九州大学 2025 年 3 月 18 日.

早川敏之

【著書】

早川敏之. シアル酸関連遺伝子(pp.220-221). 霊長類学の百科事典, 丸善出版, 2023

【論文】

Moriya Y, Fujito N.T, Terahara M, Takahata N, Satta Y, Teshima K.M, Hayakawa T. Evolution of mental traits linked to cultural development in modern humans and Neanderthals. *BioRxiv*, 2024. (doi: <https://doi.org/10.1101/2024.08.13.604521>)

【学会発表】

<国際発表>

Nakazawa Y, Imaizumi K, Eto T, Hayakawa T, Higuchi S. Dose-response relationship of light-induced melatonin suppression in East Asians. 35th Annual Meeting of the Society for Light Treatment and Biological Rhythms, Prague, Czech Republic, June 2024

<国内発表>

早川敏之, 藤戸尚子, 寺原匡弘, 森谷悠香, 手島康介, 高畑尚之, 堀田葉子. 現生人類の世界拡散における神経症傾向の抑制. 日本遺伝学会第 95 回大会, 2023 年 9 月

中澤勇介, 今泉一輝, 許諾, 徳永恭平, 大橋路弘, 江藤太亮, 早川敏之, 樋口重和. 光によるメラトニン抑制の民族差に関する研究. 日本生理人類学会第 85 回大会, 2024 年 6 月

森谷悠香, 手島康介, 早川敏之. ネアンデルタール人ゲノムにみられる IQ 関連遺伝子群における適応進化の痕跡. 第 26 回日本進化学会神奈川大会, 2024 年 8 月

奥大河, 手島康介, 早川敏之. ポリジェニックな形質の集団間の比較に使用する効果量を必要としないスコアの有効性. 日本遺伝学会第 96 回大会, 2024 年 9 月

尾方義人

【著書】

尾方義人. 社会包摂とデザイン 28 社会包摂漫画, 日本工業出版 住まいとでんき 35 巻 4 号 39-40pp, 2023 年 4 月

尾方義人. 社会包摂とデザイン 29 大谷ルールとペッパーミル, 日本工業出版 住まいとでんき 35 巻 5 号 35-36pp, 2023 年 5 月

尾方義人. 社会包摂とデザイン 30 救急車をタクシー代わりに使ってはいけません, 日本工業出版 住まいとでんき 35 巻 6 号 39-40pp, 2023 年 6 月

尾方義人. 社会包摂とデザイン 31 レディース・アンド・ジェントルメンとレディースデイ, 日本工業出版 住まいとでんき 35 巻 7 号 33-34pp, 2023 年 7 月

尾方義人. 社会包摂とデザイン 32 失格判定と判断のプロセス, 日本工業出版 住まいとでんき 35 巻 8 号 29-30pp, 2023 年 8 月

尾方義人. 社会包摂とデザイン 33 ジェンダーギャップ指数 指標を理解する, 日本工業出版 住まいとでんき 35 巻 9 号 41-42pp, 2023 年 9 月

尾方義人. 社会包摂とデザイン 34 マイナナンバーカードの社会性 未来へのデザイン, 日本工業出版 住まいとでんき 35 巻 10 号 47-48pp, 2023 年 10 月

尾方義人. 社会包摂とデザイン 35 外国人と宇宙人 さまざまな帰属による自己意識, 日本工業出版 住まいとでんき 35 巻 11 号 49-50pp, 2023 年 11 月

尾方義人. 社会包摂とデザイン 36 選挙と投票の仕組み AKB からコンクラーベまで, 日本工業出版 住まいとでんき 35 巻 12 号 29-30pp, 2023 年 12 月

尾方義人. 社会包摂とデザイン 37 休みのデザイン 働き方を考える, 日本工業出版 住まいとでんき 36 巻 1 号 45-46pp, 2024 年 1 月

尾方義人. 社会包摂とデザイン 38 アンコン、ポリコレ、マイアグとネガティブ・ケイパビリティ 他者との違いを見つめ直す, 日本工業出版 住まいとでんき 36 巻 2 号 41-42pp, 2024 年 2 月

尾方義人. 社会包摂とデザイン 39 就労継続支援 A 型/B 型 多様な労働の提供, 日本工業出版 住まいとでんき 36 巻 3 号 47-48pp, 2024 年 3 月

尾方義人. 社会包摂とデザイン 40 フロッピーとクマとブロックリー 国が指定するというルール, 日本工業出版 住まいとでんき 36 巻 4 号 31-32pp, 2024 年 4 月

尾方義人. 社会包摂とデザイン 41 ユニバーサルデザインの 7 原則とノーマライゼーションの 8 原理 背景にある考え方, 日本工業出版 住まいとでんき 36 巻 5 号 37-38pp, 2024 年 5 月

尾方義人. 社会包摂とデザイン 42 御成敗式目と武家諸法度 はるか昔の様々なルール, 日本工業出版 住まいとでんき 36 巻 6 号 39-40pp, 2024 年 6 月

尾方義人. 社会包摂とデザイン 43 動物園の倫理 未来の動物園のデザイン, 日本工業出版 住まいとでんき 36 巻 7 号 39-40pp, 2024 年 7 月

尾方義人. 社会包摂とデザイン 44 婚姻制度によりそう展 同性婚や選択的夫婦別姓を考えよう, 日本工業出版 住まいとでんき 36 巻 8 号 41-42pp, 2024 年 8 月

尾方義人. 社会包摂とデザイン 45 学校の検査 健康診断のデザイン, 日本工業出版 住まいとでんき 36 巻 9 号 31-32pp, 2024 年 9 月

尾方義人. 社会包摂とデザイン 46 チャレンジとオフサイドとタイムアウト スポーツのルールと社会包摂, 日本工業出版 住まいとでんき 36 巻 10 号 47-48pp, 2024 年 10 月

尾方義人. 社会包摂とデザイン 47 アメリカ大統領選挙の課題 民主主義の原点に立ち返る, 日本工業出版, 住まいとでんき 36 巻 11 号 43-44pp, 2024 年 11 月

尾方義人. 社会包摂とデザイン 48 生類憐れみの令と SDGs 綱吉の生命尊重の理念, 日本工業出版, 住まいとでんき 36 巻 12 号 33-34pp, 2024 年 12 月

尾方義人. 社会包摂とデザイン 49 住所から社会を見る 日本の地域や歴史、文化の象徴, 日本工業出版, 住まいとでんき 37 巻 1 号 39-40pp, 2025 年 1 月

尾方義人. 社会包摂とデザイン 50 感染症の分類と果物の規格 分類・規格の必要性と危険性, 日本工業出版, 住まいとでんき 37 巻 2 号 33-34pp, 2025 年 2 月

尾方義人. 社会包摂とデザイン 51 包括的性教育 性、生物、家族、社会を結びつける, 日本工業出版, 住まいとでんき, 37 巻 3 号 55-56pp, 2025 年 3 月

【論文】

Jiang Yujian, Ying Meng, Ogata Yoshito, Research on the Establishment of the Evaluation Method of the Improved Design of the book based on the Artificial Intelligence Dynamic Capture Technology. Wireless Internet Technology 54 – 57pp 2023 年 4 月

応 夢, 田中 瑛, 尾方 義人, 差別語の歴史的変遷の可視化と分析—『記者ハンドブック』を分析対象として, デザイン学研究 70 (4) 45 – 54, 2024 年 3 月

工藤真生, 伊原久裕, 須長正治, 尾方義人, 久米聖伍, 疋田睦, 鈴木智敏, 金子千聖, 星野純平. 社会包摂のためのピクトグラムとサイン—FINA 世界水泳 2023 大会を事例として—, デザイン学研究 作品集 (29) 18 – 23, 2024 年 7 月

応夢, 姜昱健, 尾方義人. 『美育文化』誌におけるデザイン関連記事の計量的分析—「デザイン」語の学習指導要領への導入草創期を中心に—, デザイン学研究 71 (4) 1 – 10, 2025 年 3 月

知足美加子, 尾方義人, 中村美亜, 長津結一郎. 社会包摂デザイン・イニシアティブ 2024 年度活動報告, 芸術工学研究 40 52 – 62, 2025 年 3 月

【学会発表】

<国内発表>

近藤加代子, 早瀬百合子, 尾方義人, 八尾滋, 鈴木慎也, 松本亨, 藤山淳史, 久保直紀, A luten, 菊澤育代. 地域でのプラスチックリサイクルの実際と実施体制作りについて, 環境科学会, 2023 年 9 月

尾方義人. 社会包摂デザイン・イニシアティブのこれまでにについて, 社会包摂デザイン・イニシアティブシンポジウム「多様性を解き放つため～社会包摂デザイン 3 年目の問いかけ～」, 九州大学大学院芸術工学研究院社会包摂デザイン・イニシアティブ, 2024 年 2 月

尾方義人. 「総合知の使い方：医療・健康 U とシンクタンク U の連携」, 医療・健康ユニットシンポジウム, 九州大学未来社会デザイン統括本部, 2024 年 3 月

尾方義人. シンクタンクユニットと医療・健康ユニットの連携 ～ "Wicked Problem" としての救急車の利用への総合的アプローチ～, 第 6 回 医療・健康ユニット研究会, 九州大学未来社会デザイン統括本部, 2024 年 10 月

尾方義人. 熊本地震避難所の掲示板からみる生活者のレジリエンス分析, 地区防災計画学会第 47・48 回研究会, 地区防災計画学会, 2024 年 10 月

尾方義人. 救急車利用問題研究から構築する新たな研究領域, 第 3 回医療・健康ユニットシンポジウム, 九州大学未来社会デザイン統括本部, 2025 年 2 月

【その他】

<メディア掲載>

「双日、ナノ分離膜を用いた DAC 技術の 2020 年代後半の実用化に向け新会社を設立」, 日本経済新聞電子版, 2023 年 6 月

「性別めぐる表示 見直し拡大 公共施設 固定観念の解消へ期待」, 秋田魁新報, 下野新聞, 愛媛新聞, 熊本日日新聞, 山形新聞, 新潟日報, 千葉日報 2023 年 6 月

「九大、ナノ分離膜を用いた CO2 回収技術を持つ「Carbon Xtract」に投資・事業参画」, 日本経済新聞電子版 2023 年 11 月

「気候変動に対応せよ」 韓国・プサンと福岡県内の最新事情」, NHK 福岡 2023 年 12 月

「大阪大学発ナノフォトン、米科学機器大手が買収 30 億円」, 日本経済新聞 2024 年 2 月

「九大・Carbon Xtract・JA 全農など、分離膜型 DAC 装置の施設園芸用途における早期社会実装に向けた連携協定締結」, 日本経済新聞 2024 年 3 月

「追跡! バリサーチ “仕切り” の正体を探る」, NHK 福岡放送局, ロクいち福岡, 2024 年 5 月

「仕切りのあるベンチを考える | NHK 福岡 突き止めた仕切りの正体 身近なベンチは何を問う?」, NHK 福岡 読む NHK 福岡, 2024 年 6 月

「救急救命医から学ぶ心肺蘇生のための市民講座」 NHK 福岡, 福岡 NEWS WEB, 2024 年 12 月

<展示>

「男女共同参画ぶちフェスタ「ルールとジェンダー」」, 主催: 男女共同参画ぶちフェスタ実行委員会, 筑紫野市, 筑紫野市生涯学習センター 1 階多目的ホール, 2023 年 6 月

「第 3 回 写真とことば ジェンダーデザインコンテスト」, 主催: 福岡市, 九州大学芸術工学研究院社会包摂デザイン・イニシアティブ, 福岡市男女共同参画推進センター アミカス, 2023 年 10 月

「DIDI×アミカス公開講座「表現と対話から考えるためのデザイン」」, 主催: 九州大学大学院芸術工学研究院社会包摂デザイン・イニシアティブ, 福岡市男女共同参画推進センター・アミカス 2 階視聴覚室, 2023 年 11 月

「空気から CO2 を回収する技術と社会のデザイン」 / 「創エネ・あかりパーク 2023」における新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO) プースでの展示, 主催: 創エネ・あかりパーク実行委員会, 上野恩賜公園 噴水広場, 2023 年 11 月

「漫画をよんで、子育てをじっくり考えてみる展」, 主催: 九州大学大学院芸術工学研究院 社会包摂デザイン・イニシアティブ, 九州大学大橋キャンパス 1 号館 2F ギャラリー, 2023 年 12 月

「大橋モビリティショー 2023 ～学生たちが(ずっと前に)考えた未来のモビリティ～」, 主催: 未来構想デザインコース プロダクトデザイン研究室, 九州大学大橋キャンパス 1 号館 2F ギャラリー, 2023 年 12 月

「ちいさなプロダクト展 で、しくみを考えてみた」, 主催: 九州大学芸術工学部未来構想デザインコース, 大橋キャンパス 1 号館 2F ギャラリー, 2024 年 1 月

「行為の分析展」, 主催: 九州大学芸術工学部未来共生デザインコース, 大橋キャンパス 1 号館 2F ギャラリー, 2024 年 1 月

「総合知とデザインと未来」, 主催: 九州大学芸術工学部未来構想デザインコース プロダクトデザイン研究室、九州大学ネガティブエミッションテクノロジー研究センター未来システムデザイン研究部門 共催: 九州大学総合研究博物館九州大学未来社会デザイン統括本部 シンクタンクユニット 協力: 九州大学大学院工学研究院/大学院工学部 君塚研究室、九州大学カーボンニュートラル・エネルギー国際研究所 藤川研究室, 九州大学フジギャラリー, 2024 年 4 月～2024 年 5 月

「SusHi Tech Tokyo 2024」JCCL 社ブース出展/展示企画, SusHi Tech Tokyo 2024 グローバルスタートアッププログラム実行委員会 SusHi Tech Tokyo 2024 Global Startup Program, 東京ビッグサイト 西展示棟 1・2 ホール, 2024 年 5 月

「脱炭素とデザイン」展示, 九州大学芸術工学部 多次元デザイン実験棟 グランドオープン 2024 年 6 月

男女共同参画ぶちフェスタ「婚姻制度によりそう展」, 主催: 男女共同参画ぶちフェスタ実行委員会, 筑紫野市, 筑紫野市生涯学習センター 1 階多目的ホール, 2024 年 6 月～2024 年 7 月

「施設園芸・植物工場展 2024 (GPEC)」出展・製品デザイン, 主催: (一社)日本施設園芸協会, 東京ビッグサイト 南 1・2 ホール, 2024 年 7 月

「南区こども大学 2024 リサイクル・バイオプラスチックについて学ぼう」, 主催: 福岡市南区役所企画振興課 九州大学芸術工学部総務課企画・広報係 南区こども大学 2024, 九州大学大橋キャンパス 1 号館, 2024 年 7 月

「ハートフルフェスタ福岡 2024 九州大学 DiDi ジェンダー展」, 主催: ハートフルフェスタ福岡実行委員会, ハートフルフェスタ福岡 2024, ソラリアプラザ 1 階, 2024 年 10 月

藤智亮

<国内発表>

平沢洗, 澤井賢一, 松前あかね, 藤智亮, 樋口重和. 視聴覚刺激の低減とデザイン経験の違いが創造性に与える影響. 日本生理人類学会第 85 回大会, 2024 年 6 月

藤智亮. 赤ちゃんの鎮静反応の解明、育児負担軽減プロジェクト、応用生理人類学研究センターレジリエンスデザイン部門研究会, 2024 年 10 月

種子田昌樹, 藤智亮. 乳児の鎮静反応の解明に向けて. 西九州テクノコンソーシアム技術シーズ・ニューズ発表会, 2024 年 12 月

藤智亮, 伊佐治大, 河原雅典. 歩行困難者のための防災用背負搬送具のフレーム強度検討. 地区防災計画学会第 11 回大会, 2025 年 3 月

藤智亮, 岡双葉, 河原雅典. 容易な背負い動作を実現するための防災用背負搬送具の機能設計. 地区防災計画学会第 11 回大会, 2025 年 3 月

西村英伍

【学会発表】

<国内発表>

樋口一葉, 西村英伍. ノート型パソコン作業中における休憩が主観的疲労と着座姿勢変化に与える影響の調査, 第 20 回日本感性工学会春季大会, 2025 年 3 月

西村英伍. 実験プロトコルの透明性向上のための統合型タイムライン管理ツールの開発, 第 20 回日本感性工学会春季大会, 2025 年 3 月

長谷川豪希, 西村英伍. マニュアル化されていない組み立て作業の行動観察, 第 20 回日本感性工学会春季大会, 2025 年 3 月

内野々智博, 西村英伍. デジタルデバイス使用時における姿勢の推移に関する探索的研究, 第 20 回日本感性工学会春季大会, 2025 年 3 月 5 日

西村英伍, 英真次, 曾我浩二. 機械学習を用いた行動と表情変化の観察手法, 日本生理人類学会第 85 回大会, 2024 年 6 月

西村英伍, 新宮 匠. キーポイント検出技術による動画からの定量的行動観察方法, 第 19 回日本感性工学会春季大会, 2024 年 3 月

田北雅裕

【論文】

「フォスタリングカードキット TOKETA : 『子どもの権利』に根ざしたデザイン」, 筆頭著者, デザイン学研究作品集 2023 年 28 巻 1 号, 日本デザイン学会, p.1_114・1_119, 2023

【学会発表】

<国内発表>

地域での親子応援のかたち～子どもショートステイの可能性を探る, 日本子ども虐待防止学会 第 30 回学術集會かがわ大会 公募シンポジウム, 2023 年 11 月 (座長・全体コーディネーター)

NPO 地域共生を支える医療・介護・市民全国ネットワーク 第3回全国の集い in 福岡, 2023年11月 (講演・コーディネーター)

国勢調査活用プロジェクト公開学習会 国勢調査データを用いて何が出来る?何をすべき?, 基礎教育保障学会第8回研究大会, 2023年7月 (招待講演)

2023年地域共生を考える集い, NPO 地域共生を支える医療・介護・市民全国ネットワーク講演, 2023年5月 (招待講演)

【その他】

<受賞>

フォスタリングカードキット「TOKETA」, 第18回キッズデザイン賞・審査委員長特別賞受賞, 2024年10月

子どもの権利を学ぶワークショップキット「きかせてジャーニー」, 第18回キッズデザイン賞受賞, 2024年10月

<作品>

公益財団法人日本財団「つながりの連絡帳」クリエイティブディレクション・編集・ライティング, 2024年3月

子どもの権利を学ぶワークショップキット「きかせてジャーニー」企画制作, 2024年2月

縄田 健悟

【著書】

縄田健悟. だけどチームがワークしない——“集団心理”から読み解く 残念な職場から一流のチームまで. 日経 BP, 2025

縄田健悟. チーム・プロセス (第5章), チームの効果性と意思決定 (第10章), チームレベルの測定と分析 (第13章). 山口裕幸 (編著), チーム・ダイナミクスの行動科学: 組織の生産性・安全性・創造性を高める鍵はどこにあるのか, ナカニシヤ出版, 2024

【論文】

大賀哲・縄田健悟・藤村まこと. メディア信頼と陰謀論信念の関連性: オールドメディアとニューメディアの比較分析を通じて. メディア研究, 106:163-176, 2025. (doi: 10.24460/jamsmedia.106.0_163)

Nawata K. Group violence in crime: Analyzing crime severity, group size, and juvenile involvement through police statistics and newspaper articles in Japan. *Asian Journal of Criminology*, 2024. (doi: 10.1007/s11417-024-09435-z)

Nawata K, Oga T, Fujimura M. The relationship between neoliberal belief and socio-political attitude in Japan: Conservative psychological tendencies of neoliberals. *Cogent Psychology*, 11(1):2367346, 2024. (doi: 10.1080/23311908.2024.2367346)

Nawata K, Fujimura M, Oga T. Friend-enemy divided thinking from the perspective of intergroup conflict: Relationship with political attitudes toward international relations and conspiracy beliefs. *Sage Open*, 14(2):21582440241249166, 2024. (doi: 10.1177/21582440241249166)

Otsubo K, Nawata K, Yamaguchi H. Conformity-based out-group aggression: Does an in-group audience intensify out-group aggression as a result of conformity? *Japanese Psychological Research*, 2024. (doi: 10.1111/jpr.12554)

縄田健悟. 産業ストレスに活かすグループ・ダイナミクス. 産業ストレス研究, 31:175-181, 2024.

縄田健悟・池田浩・青島未佳・山口裕幸. 組織におけるチームワークの影響過程に関する統合モデル——チームレベルの分析による検討. 心理学研究, 94:462-472, 2024. (doi: 10.4992/jpsy.94.21064)

縄田健悟・池田浩・青島未佳・山口裕幸. チームワークにおけるチーム・バーチャリティ 2 側面の相反する関連性: 職場のテレワークはチームワークにどのように影響するか. 社会心理学研究, 39:76-86, 2023. (doi: 10.14966/jssp.2213)

縄田健悟・大賀哲・藤村まこと. COVID-19に関する陰謀信念がもたらす感染防止政策の否定と感染リスク行動—感染リスク軽視の媒介的影響—. 実験社会心理学研究, 62:182-194, 2023. (doi: 10.2130/jjesp.si5-4)

【その他】

<受賞>

日本心理学会 2024年度優秀論文賞 (縄田健悟・池田浩・青島未佳・山口裕幸), 2024年7月

日本社会心理学会 2024年度優秀論文賞 (縄田健悟・池田浩・青島未佳・山口裕幸), 2024年8月

<メディア掲載>

月刊高校教育「教員集団が『チーム』としてうまくワークするには? (上)」〈巻頭インタビュー〉, 2025年6月号

月刊高校教育「教員集団が『チーム』としてうまくワークするには? (下)」〈巻頭インタビュー〉, 2025年7月号
(<https://www.gakuji.co.jp/book/b10135409.html>)

日本の人事部「キーパーソンが語る"人と組織"」
「優秀な人が集まっても成果が出ない」のはなぜか? 集団心理から考える、「チームがワークする」ために必要なものインタビュー記事 2025年5月
(<https://jinjibu.jp/article/detl/keyperson/3755/>)

朝日新聞デジタル「性格検査『MBTI』、採用活動にまで 若者に人気、根拠には疑問も」インタビュー記事, 2024年8月31日
(<https://digital.asahi.com/articles/ASS8Z1JKNS8ZULBH00WM.html>)

朝日新聞 朝刊「(耕論) 暴れるサポーター」岡野雅行さん, ベン・メイブリーさん, 縄田健悟さんインタビュー記事, 2024年1月17日

朝日小学生新聞「(耕論) 暴れるサポーター」再編成インタビュー記事, 2024年5月24日
(<https://digital.asahi.com/articles/DA3S15840009.html>)

朝日新聞 夕刊「(にじいろの議) 分断引き起こす心のクセ 『敵』を作り戦う私たち」エッセイ, 2023年11月8日
(<https://www.asahi.com/articles/DA3S15787907.html>)

外部研究資金一覧

環境適応部門

競争的資金

- ・ 2023～2025 年度, 基盤研究(C), 分担, 生体・細胞の全遺伝子発現変動に基づく急性低酸素応答を駆動する主要遺伝子群の解明 (前田享史)
- ・ 2019～2023 年度, 基盤研究(B), 分担, 日本人における性ホルモン・骨代謝回転・骨量間関連の生理的・遺伝的研究 (西村貴孝)
- ・ 2021～2023 年度, 基盤研究(B), 分担, ヒトの熱産生能力多様化の進化基盤の解明 (西村貴孝)
- ・ 2022～2026 年度, 基盤研究(A), 分担, 4 万年のアジア人類史から読み解く「ヒト多様性のパラドックス」(西村貴孝)
- ・ 2023～2025 年度, 基盤研究(B), 代表, ヒトの高地適応・高地馴化から読み解く「適応の時間と表現型多様性のパラドックス」(西村貴孝)
- ・ 2023～2025 年度, 環境省環境研究総合推進費(環境問題対応型), 分担, 極端高温等が暑熱健康に及ぼす影響と適応策に関する研究 (西村貴孝)
- ・ 2023～2024 年度, 学術変革・公募班, 代表, 時間生物学と微分幾何学の融合による波形データ解析手法の提案 (伊藤浩史)
- ・ 2024～2029 年度, AMED-CREST, 分担, マルチスケールリズムの相互作用に伴う性依存的な生体変調機序の統合理解と予測技術への応用 (伊藤浩史)
- ・ 2024～2027 年度, 基盤研究(A), 分担, 動物集団における情報伝達機構の解明 (伊藤浩史)
- ・ 2024～2026 年度, 萌芽研究, 分担, 母体-胎児間の原初的コミュニケーションに関する基礎的検討 (伊藤浩史)
- ・ 2019～2023 年度, 新学術領域研究・研究計画, 研究代表者, 集団の拡散と文明形成に伴う遺伝的多様性と身体的変化の解明 (瀬口典子)

- ・ 2019～2023 年度, 新学術領域研究, 分担, 出ユーラシアの統合的人類史学：文明創出メカニズムの解明 (瀬口典子)
- ・ 2020～2024 年度, 基盤研究(A), 分担, 先住民族研究形成に向けた人類学と批判的社会運動を連携する理論の構築 (瀬口典子)

企業との共同研究

- ・ 2017～2024 年度, 受託研究, 代表, 寒冷環境における入浴行為による身体負担と血圧変動および心理反応についての研究 (前田享史)
- ・ 2020～2024 年度, 共同研究, 代表, 入浴行為による健康への影響 (前田享史)
- ・ 2021～2023 年度, 共同研究, 代表, 圧力変動設備を利用した耳ツンの体感評価 (前田享史)
- ・ 2022～2023 年度, 共同研究, 代表, 衣服の快適性 (前田享史)
- ・ 2022～2024 年度, 共同研究, 代表, 空調環境における温冷感覚の個人差因子の研究 (前田享史)
- ・ 2021～2024 年度, 共同研究, 代表, 深部体温の見える化を目指した生理学的研究 (西村貴孝)
- ・ 2023 年度, 共同研究, 代表, 生理反応検知デバイスを用いた深部体温の見える化を目指した研究 (西村貴孝)
- ・ 2024～2025 年度, 共同研究, 代表, 入浴と疲労回復に関する基礎研究 (西村貴孝)
- ・ 2024～2025 年度, 共同研究, 代表, 入浴習慣と月経前症候群に関する研究 (西村貴孝)
- ・ 2024～2025 年度, 共同研究, 分担, アルコールによる酔いのメカニズムに関する研究 (西村貴孝)

アクティブライフ部門

競争的資金

- ・ 2019 年度～2024 年度, 基盤研究(C), 代表, 「リスクゼロ段階からの転倒予防介入指針の開発 - 身体感覚と運動機能のズレによる層別化」(能登裕子)
- ・ 2021 年度～2023 年度, 挑戦的萌芽研究, 分担, 「人間工

- 学的アプローチによる看護師の情報取得向上を目指した医薬品情報のデザイン展開」(能登裕子)
- ・ 2021年度～2024年度, 基盤研究(A), 代表, 「人間の適応能に基づいた動作アシスト機能の最適化」(村木里志)
 - ・ 2021年度～2024年度, 基盤研究(C), 分担, 「心身機能の維持・向上を目的とした集団指導に対する客観的な有効性検証に関する研究」(村木里志)
 - ・ 2021年度～2023年度, 若手研究, 代表, 「Relationship and Mechanisms between Biomechanical Factors and Median Nerve Compression in the Office Workplace」(Loh Ping Yeap)
 - ・ 2021年度～2023年度, 基盤研究(C), 代表, 「多次元超低周波ストリームデータのための次元相関を考慮に入れたパターン認識法の開発」(大草孝介)
 - ・ 2023年度～2025年度, 基盤研究(C), 分担, 「発育発達を考慮した体力・運動能力評価表の開発に向けた取り組み」(村木里志)
 - ・ 2023年度～2026年度, 基盤研究(B), 分担, 「ダブル Brain (ヒト脳+AI 脳) 協調型人間拡張ロボットの創成と実証」(村木里志)
 - ・ 2023年度～2025年度, 基盤研究(C), 分担, 「デザイン人材とビジネス人材との効果的な協働に関する研究」(松隈浩之)
 - ・ 2023年度～2025年度, 基盤研究(C), 分担, 「医療とデザインを融合した創造的教育プログラムの開発と実証」(松隈浩之)
 - ・ 2023年度～2024年度, 基盤研究(C), 分担, 「時間的・空間的制約下におけるマルチモーダルなロービジョン移動ケアに関する研究」(Loh Ping Yeap)
 - ・ 2023年度～2026年度, 基盤研究(B), 代表, 「注意機構を持つ異常値検知手法と深層確率モデルの統合と超高次元時系列データへの応用」(大草孝介)
 - ・ 2023年度～2025年度, 基盤研究(C), 代表, 「大腸腫瘍発見率向上を目指した視線移動パターン指図システムの開発」(大草孝介)
 - ・ 2024年度～2026年度, 基盤研究(A), 代表, 「複雑な動作のアシストを実現するための人間側の運動制御の理解とその応用」(村木里志)
 - ・ 2024年度～2026年度, 挑戦的研究(萌芽), 代表, 「高齢者のテクノアクセタビリティの理解と支援」(村木里

志)

- ・ 2024年度～2026年度, 基盤研究(C), 分担, 「Making Telemedicine More User-Friendly to Make Healthcare Accessible to All」(松隈浩之)
- ・ 2024年度～2028年度, 基盤研究(B), 代表, 「脳磁図データを用いた機械学習による夢内容の推定」(大草孝介)

感性・ヒューマニティ部門 競争的資金

- ・ 2022年度～2023年度, テルモ生命科学振興財団研究助成, 代表, 「水晶体混濁の客観的評価を可能にする小型検査機器の開発」(樋口重和)
- ・ 2020年度～2024年度, 基盤研究(A), 分担, 「網膜メラノシン細胞による生体への影響の解明: 心理学・生物学・工学の手法を用いて」(樋口重和)
- ・ 2022年度～2026年度, 基盤研究(B), 分担, 「子どもの健康睡眠習慣を考慮したスクリーンタイム/グリーンタイムガイドラインの開発」(樋口重和)
- ・ 2022年度～2024年度, JST 研究成果最適展開支援プログラム(A-STEP), 分担, 「発達障害リスクをもつ乳幼児に対する d-セラピー療育法の開発」(樋口重和)
- ・ 2023年度～2026年度, 基盤研究(B), 分担, 「睡眠改善の促進妨害要因の解析と集団特性に応じた新たな睡眠教育プログラムの構築」(樋口重和)
- ・ 2023年度～2026年度, 基盤研究(B), 代表, 「ヒト概日システムの光感受性の民族差と進化適応に関する研究」(樋口重和)
- ・ 2019年度～2024年度, 基盤研究(B), 代表, 「色の感覚意識体験に関連する神経表現の共通性と多様性」(平松千尋)
- ・ 2023年度～2024年度, 挑戦的研究(萌芽), 代表, 「色覚多様性から挑む色のクオリアの性質」(平松千尋)
- ・ 2024年度～2025年度, 学術変革領域研究(A) 公募研究, 代表, 「夢の色のクオリアに関連する神経ネットワーク構造」(平松千尋)
- ・ 2023年度～2024年度, 九州大学人社系学際融合プログラム, 分担, 「音楽サブスク時代における音楽体験の実態とデザイン」(澤井賢一)
- ・ 2024年度, 九州大学数理・データサイエンスに関する教育・研究支援プログラム, 代表, 「感覚精度の個人差

に対してロバストな心理物理実験手法の提案と検証」

(澤井賢一)

- ・ 2019年度～2023年度, 若手研究, 代表, 機械学習技術を用いた夢の情動価の推定に関する研究 (元村祐貴)
- ・ 2020年度～2024年度, 基盤研究(C), 分担, 成人の愛着スタイルが心身のストレス反応に与える影響およびその脳内機序 (元村祐貴)
- ・ 2021年度～2023年度, 基盤研究(B), 分担, 不眠症に対する遠隔心理療法の有効性と社会実装, AIを用いた作用機序及び病態の解明 (元村祐貴)
- ・ 2024年度～2028年度, 基盤研究(B), 代表, 脳磁図データを用いた機械学習による夢内容の推定 (元村祐貴)
- ・ 2021年度～2026年度, 国際共同研究強化(B), 分担, 脳血流低下時の脳血管・脳機能測定から安全性の高いヒューマンインタフェースを考える (元村祐貴)
- ・ 2019年度～2023年度, 基盤研究(B), 代表, 「こころを想定するこころ」の進化と発達: 「心理化傾向」仮説に基づく総合的検討 (橋彌和秀)
- ・ 2019年度～2023年度, 基盤研究(S), 分担, 「社会性の起原と進化: 人類学と霊長類学の協働に基づく人類進化理論の新開拓」 (橋彌和秀)
- ・ 2018年度～2023年度, 基盤研究(C), 分担, 「子どもの認知プロセス—環境要因を考慮した親・保育者・一般成人の比較」 (橋彌和秀)
- ・ 2022年度～2026年度, 基盤研究(S), 分担, 「アフリカ狩猟採集民・農牧民のコンタクトゾーンにおける子育ての生態学的未来構築」 (橋彌和秀)
- ・ 2023年度～2029年度, 受託研究, 分担, 「Do Fundamental Resource Distribution Principles of Need, Effort & Coalition Size Manifest Even in the Infant Mind?」 (橋彌和秀)
- ・ 2019年度～2024年度, 基盤研究(C), 代表, 「精神疾患関連遺伝子から探る現生人類における社会の変化・発展の遺伝的基盤」 (早川敏之)
- ・ 2024年度～2026年度, 基盤研究(C), 代表, 「現代人の成立に関わる精神形質の進化」 (早川敏之)
- ・ 2023年度～2026年度, 基盤研究(B), 分担, 「ヒト概日システムの光感受性の民族差と進化適応に関する研究」 (早川敏之)

企業との共同研究

- ・ 2023年度～2025年度, 岩崎電気株式会社, 「夜間の光環境における生体内ホルモンへの影響および改善手法の検討」 (樋口重和)
- ・ 2024年度～2025年度, 株式会社本田技術研究所, 「アルコールによる酔いのメカニズムに関する実験的検証」 (樋口重和)
- ・ 2023年度～現在, VIE株式会社, イヤホン型脳波計による睡眠測定に関する研究 (元村祐貴)

レジリエンスデザイン部門

競争的資金

- ・ 2020年度～2024年度, 基盤研究(B), 分担, 「被災者に寄り添う災害レジリエンス情報プラットフォームの構築」 (尾方義人)
- ・ 2024年度～2028年度, 基盤研究(B), 代表, 「赤ちゃんの鎮静反応の解明とそれを応用した育児負担軽減プログラムの創出及び社会実装」 (藤智亮)
- ・ 2024年度～2026年度, 科学研究費助成事業 若手研究, 「ユーザーの表情の微細な変化に対する観察・分析・記述方法の研究」 (西村英伍)
- ・ 2023年度～2026年度, 基盤研究(B), 分担, 「リーダーとメンバーとの地理的距離を克服するセキュアベース・リーダーシップ論の構築」 (縄田健悟)
- ・ 2021年度～2025年度, 基盤研究(C), 分担, 「社会から孤立した者はなぜ無差別殺傷を行うのか—その予防に向けて—」 (縄田健悟)
- ・ 2020年度～2025年度, 基盤研究(C), 代表, 「集団による暴力と反社会性をもたらす局所的文化とその“集団心理”過程の解明」 (縄田健悟)

企業との共同研究

- ・ 2023年度, 福岡市, 「令和5年度大学連携事業 ジェンダーデザイン・コンテスト」 (尾方義人, 中村美亜)
- ・ 2023年度, 環境省, 「令和5年度脱炭素型循環経済システム構築促進事業」 (近藤加代子, 尾方義人)
- ・ 2022年度～2023年度, 「福岡市におけるバス停、およびバス案内情報のためのデザインに関する調査」 (伊原久裕, 尾方義人, 迫坪知広)
- ・ 2023年度～2024年度, 「福岡市におけるバス停、およびバス案内情報のためのデザインに関する調査」 (迫坪知広, 尾方義人)

- ・ 2024 年度, 環境省, 「令和 6 年度脱酸素型循環経済システム構築促進事業」(近藤加代子, 尾方義人)
- ・ 2024 年度, 西部ガス株式会社, 「西部ガスグループカーボンニュートラル 2050」実現に資する研究助成／「カーボンニュートラルを市民と考えるためのデザインフィクション・シナリオライティングの研究」(尾方義人)
- ・ 2024 年度, メイワフォーシス株式会社, 「携帯型葉面積指数 (LAI) 測定装置のデザイン実装」(尾方義人)
- ・ 2023 年度～2024 年度, YKK 株式会社, 「DAC を含む九州大学先端研究所技術と YKK グループ事業商材に関する社会実装に向けた研究」(尾方義人, 藤川茂紀)
- ・ 2023 年度～2025 年度, 株式会社荏原製作所, 「ドライ真空ポンプに係るアドバンスデザインの開発やプロモーションに関する研究」(尾方義人)
- ・ 2023 年度～2024 年度, タンスのゲン株式会社, 「現代日本のリビング空間における行動と姿勢の観察分析に基づく新しい家具形態の研究」(西村英伍)

応用生理人類学研究センター年報（2023-2024年度）

発行日：2025年12月1日

編集発行：九州大学大学院芸術工学研究院附属 応用生理人類学研究センター
〒815-8540 福岡市南区塩原 4-9-1

九州大学大橋キャンパス 応用生理人類学研究センター事務局

E-Mail： parc@design.kyushu-u.ac.jp

URL： <http://www.parc.design.kyushu-u.ac.jp/>



Ⅲ 応用生理人類学研究センター
PHYSIOLOGICAL ANTHROPOLOGY RESEARCH CENTER

〒815-8540 福岡市南区塩原 4-9-1 九州大学大学院芸術工学研究院
<http://www.parc.design.kyushu-u.ac.jp/>